

「既存事業の充実・拡充」については、新型コロナウイルス禍により、多数の主催・主管事業が休止、見送りとなったため、その充実や拡充については、2021年度以降に企図、展望することとなった。

その中でも、熊取町における「中学校部活動スポーツ指導者派遣事業」や、2018年度から、本学が包括連携協定（＊1）を締結する大阪大学大学院医学系研究科も参画する「大阪大学Society 5.0（＊2）実現化研究拠点支援事業：ライフデザインイノベーション研究拠点・グランドチャレンジ研究（＊3）」やその研究・実証フィールドの1つとしての熊取町における「健康寿命延伸や医療費等の削減に向けた取組み」での施策については進展をみせたので、次稿以降で後述する。

＊1：締結日：2016年3月14日

＊2：Society 5.0 とは・・・IoTビッグデータ、ロボット技術、人工知能等のイノベーションを産業や社会生活に活用し、人々が活力に満ちた質の高い生活を実感できる社会

＊3：グランドチャレンジ研究（http://www.ids.osaka-u.ac.jp/ildi/recruitment/result_2018.html）

なお、新型コロナウイルス禍の好転やその対応策の進展（ワクチンの普及など）はまだまだ不透明なため、2021年度以降については、ウィズコロナ、ポストコロナを見越した新たな展開や方策の立案なども含めた、既存策の改編や進化、施策自体の改廃を検討する必要がある。

派遣制度の概要

大阪体育大学は、2018年3月2日に熊取町と「“熊取町×大阪体育大学”DASHプロジェクトに関する協働協定」を締結した。その協定内の5つの協働項目のひとつである「運動・スポーツの推進」において、スポーツ局が先導的に展開、2019年4月1日に「中学校部活動スポーツ指導者派遣事業に関する協定書」を締結、2020年2月から「中学校部活動スポーツ指導者派遣事業」を開始した。

「中学校部活動スポーツ指導者派遣事業」は、本学のシンボルでもある各運動クラブの所属学生が、熊取町立中学校の各運動部活動のニーズに応じ、継続的に運動部の指導に出向し、自身の日頃の競技活動や所属クラブで培った知見や経験を、各運動部所属生徒の指導へ還元し、生徒の部活動経験の充実と対象運動部の顧問教諭の業務負担軽減と指導環境の一助となることをめざした制度である。

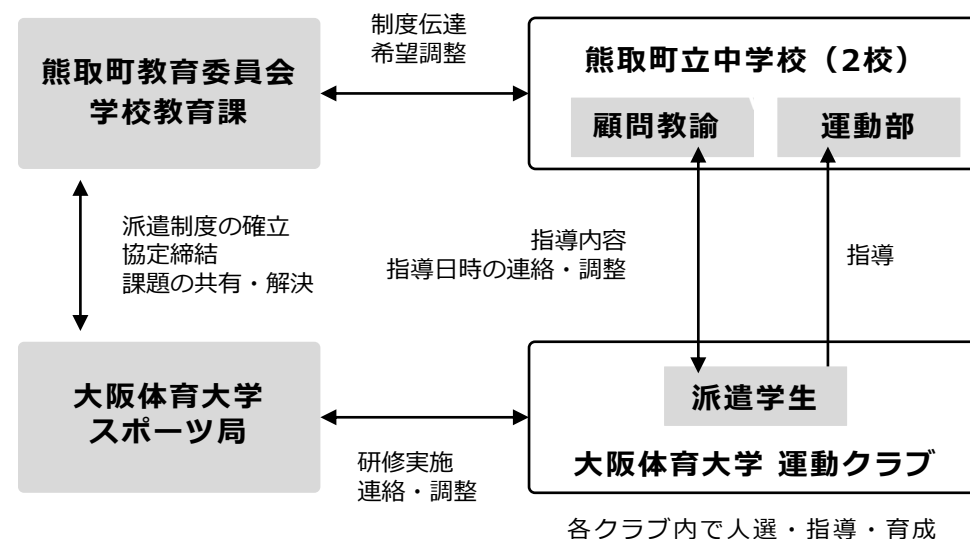
派遣までのプロセス

- 1) 制度立案のための協議調整（本学スポーツ局と熊取町）
- 2) ニーズの把握（各中学校へのヒアリング）
- 3) トライアルの実施
- 4) 協定締結
- 5) 実施にあたっての条件や課題の協議・調整
- 6) 実派遣の開始と調整（適宜）

上記、1)～3)は2019年の初年度において経た過程である。

2020年度はCOVID-19禍の中、熊取町と本学双方の様々な活動が制約がある中、本件の再開の時期を探り、事前調整を経て、後掲のとおり、2020年11月からの実施・展開を行った。

なお、毎年度、4)の本件実施にあたり「中学校部活動スポーツ指導者派遣事業に関する協定書」を締結、それにもとづいた「実施要領」を取り交わし、本件事業を遂行している。



- 1) 派遣先の情報：熊取町立中学校2校 スポーツ種目：武道2クラブ、球技2クラブ
- 2) 派遣学生の情報：計8名（4年生4名、3年生3名、2年生1名）（内訳）武道3名、球技5名
- 3) 稼働実績：2021年11月～（自主事業につき、継続中）

（派遣学生から報告書から）

＜指導に関与した所感（心に感じたこと、思ったこと）＞

- 学生である立場の者がこのような事業に携わることができるということに関して、社会とも携わりとても貴重な経験であると感じた。スポーツ庁、教育委員会、大学、顧問の先生、生徒、派遣学生等、これらの連携性に魅力を感じた。
- 自由奔放なチームだと思った。チームに目標がないため、ただ（当該球技）をしているだけだった。何が良くて、何が悪いことなのかも知らないチーム状況で始まり、この3か月間で少しは良くなることができたと思う。

＜指導に関与する前と関与後の考え方（差異や想定外のことがあれば）＞

- 指導の重要性について、課題を提示し生徒側の改善・向上を目的として取り組むことが要だと考えていた。関与後は自ら生徒の課題を認識しつつ、生徒との関わり合いの中から生徒が抱く疑問・課題・目標に眼差しを向け共有することで取り組みの質が相互で良くなるというように捉え方が変わった。
- 練習時間が1時間半しか取れないことや、全員揃うことがなかなかなかった。1回の練習で教えることが限られたり、休んでいる生徒に別で説明したり、何回も説明しないといけないことが予定外であった。

＜指導に関与して良かったこと、嬉しかったこと＞

- 様々な方々と関わり合いから、教職への捉え方の視野が広がったこと。（当該武道）の基本動作について理合と関連づけながら生徒と共に考え、その日の目標に向かって取り組めたこと。
- 生徒全員バスケットボールが好きなこと、元気があることが良かった。

（派遣学生から報告書から、前頁からの続き）

＜指導に関与して難しかったこと、困ったこと＞

- 派遣先の中学校の予定に自身の予定がなかなか合わず、なかなか派遣回数を重ねることができなかったこと。派遣日の調整。
- 中学校から（当該球技）を初めた生徒が多く、改めて正しい基本を身に付けさせることが難しかった。

＜指導に関与して考えた課題や問題点（運動部活動に係る課題も含めて）＞

- 学内部活動全関係者にとってより質の高い有意義な部活動を目指して、生徒への具体的な派遣事業情報（派遣学生に関する内容、事業上の取り組み内容…等）発信の工夫。これらに関しての派遣学生自身の工夫の必要性、または生徒に向けて情報発信・共有の許可交渉の必要性の検討。
- 今の時代怒る指導は難しくなっているが、そこに妥協して指導していたら生徒になめられ練習にならない、指導をしても効かないなど自由ばかりになってしまう。だから、ルールや約束事を決め絶対に守らせることが必要だと思った。

＜今後のこの活動への展望（本件に今後抱える後輩へのメッセージ）＞

- このような貴重な経験を地域貢献または自身のキャリアアップ等にかし、この活動が各関係者の良い刺激となり、相乗効果となることを期待したい。
- 自分の思ったことをできる環境だから、周りの目を気にすることなく自分自身のレベルアップに繋がる活動にして欲しい。

＜この活動を通じて自身の将来について考えたこと＞

- 将来、一人の人間および指導者としての在り方について改めて考えさせられた。従来の指導者からもう一段階レベルアップするきっかけをいただき、柔軟な対応力が必要と考えたとともに、自身の中で何を大事とするか、その明確化・具現化の重要性について深く考えさせられた。
- 必ず目標をもって取り組むが大切だと思った。生徒に目標を聞いても個人の目標・チームの目標が何もない状況で練習していた。それではうまくはならない。なので、私が今後指導するクラブでは、毎年目標を立てさせ、1年間目標に向かって取り組ませるようにする。

本事業は、2018年度から、本学の全学的なプロジェクト研究として「運動能力向上と傷害・転倒予防を目指した下肢伸筋群伸張性制御能力の定量化」について取り組み、スポーツ選手の傷害予防とパフォーマンス向上ならびに中高齢者の転倒リスクの低下と歩行能力の低下抑制の一助となるビックデータの収集とそれにもとづいたアプリケーションの開発とそれを活用した運動プログラムの提供をめざすものである。

■2018～2019年度：健康・スポーツPLR（Personal Life Records）プラットフォーム創設プロジェクト：スマートフォンを用いたPER（Personal Exercise Records）アプリケーションの開発～スポーツ傷害予防や健康寿命延伸をめざして～

（事業要旨）傷害発生や転倒には下肢伸筋群の伸張性収縮制御能力の低下が関連するという仮説から、下肢伸筋群の伸張性制御能力を定量化する方法を確立し、伸張性制御能力の低下がアスリートにおいてはACL損傷リスクの増大と跳躍パフォーマンス低下に関連し、高齢者においては転倒リスクの増大と歩行能力低下に関連していることを明らかにした。

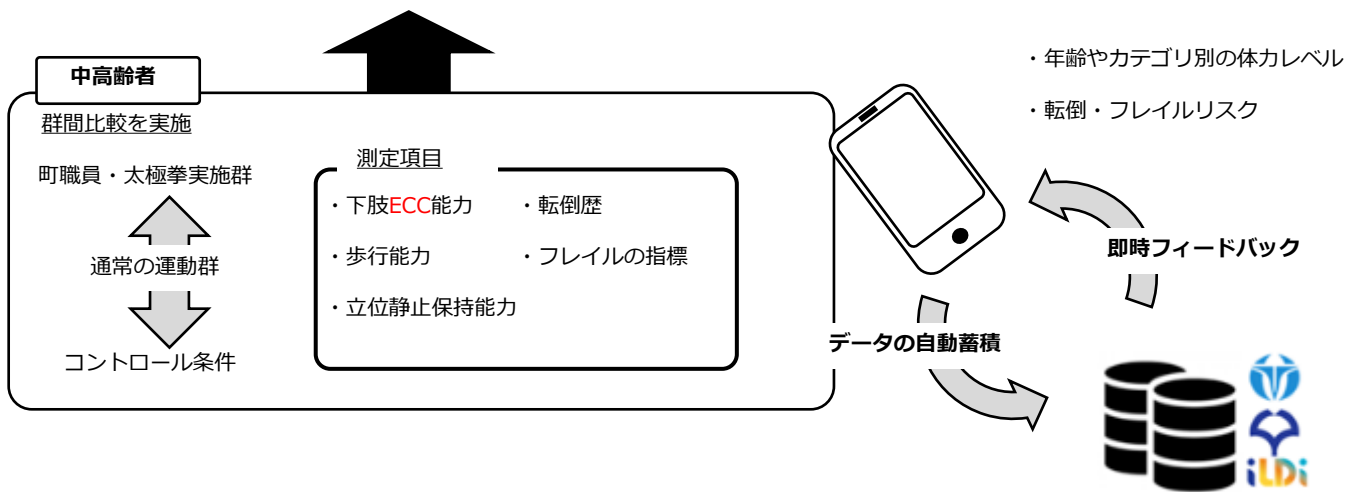
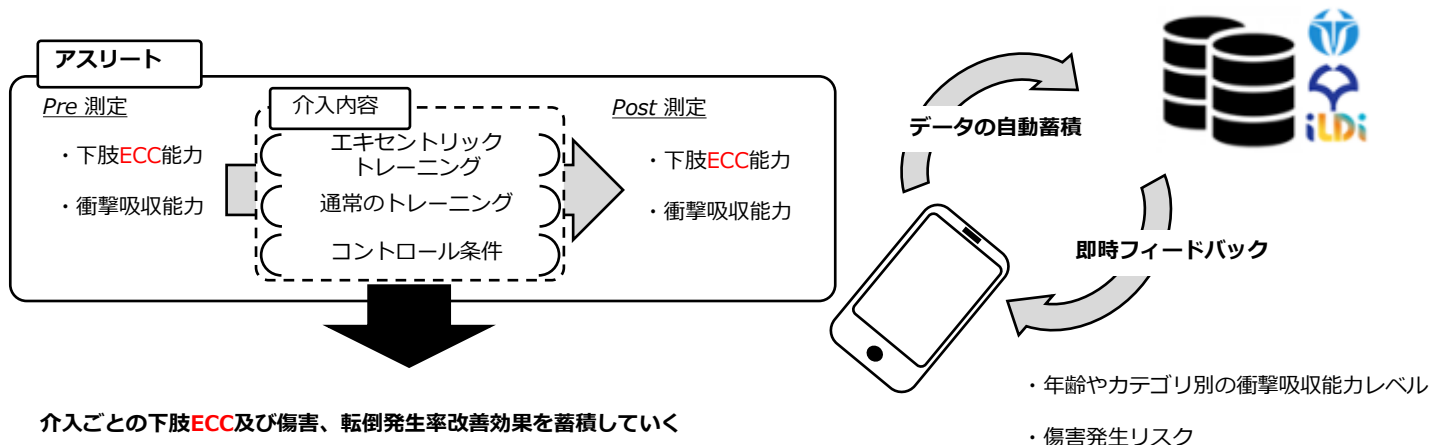
■2020～2021年度「伸張性トレーニングがアスリートのスポーツ傷害予防や高齢者の体力維持・転倒予防に及ぼす影響」

（事業要旨）2018～2019年度に取り組んだグランドチャレンジ研究を継続し、以下の3つのプロジェクトに取り組み、世代や目的を問わず誰もが簡単に自身の身体機能や運動能力を可視化し、フィードバックを受ける方法の確立をめざしている。

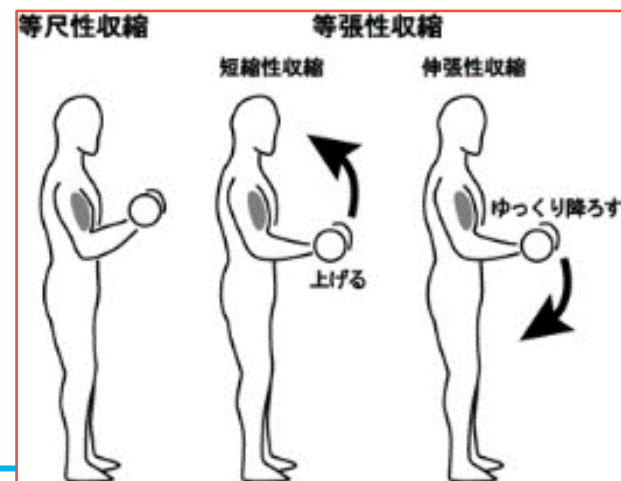
- （1）スポーツ選手における高強度下肢伸張性トレーニングが下肢伸筋群の伸張性制御能力の改善と衝撃吸収能力の向上への寄与を検討
- （2）高齢者における下肢伸張性運動が下肢伸張性収縮制御能力と身体機能の改善へ寄与するかを検討すること
- （3）2018～2019年度のグランドチャレンジ研究において確立した下肢伸張性制御能力を定量化する方法を応用し、スマートフォンを用いて下肢伸張性制御能力を定量化できるアプリケーションの開発。

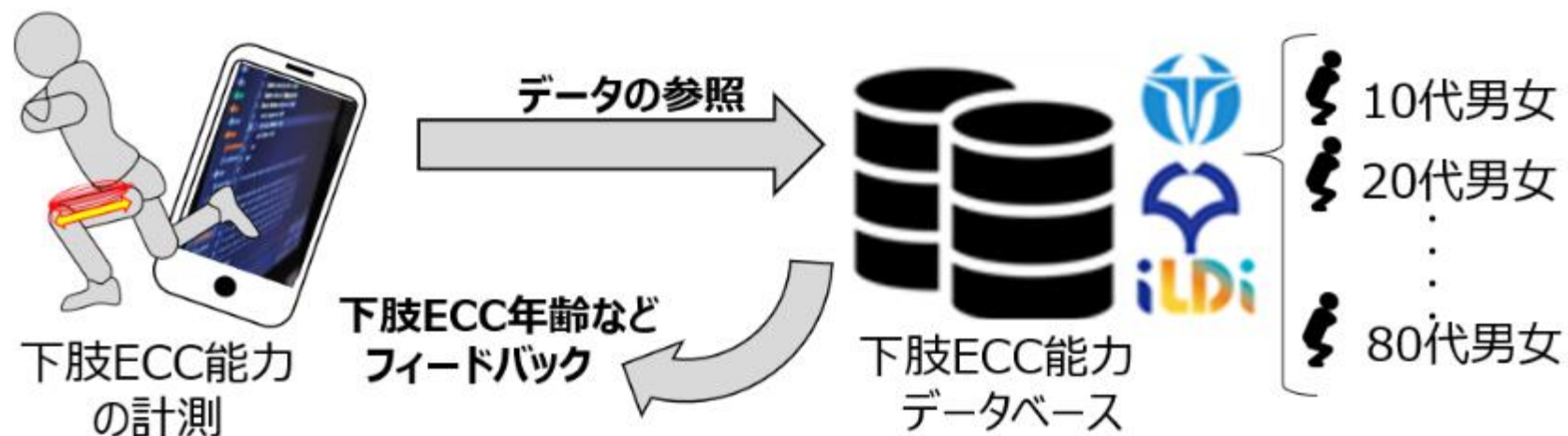
本グランドチャレンジ研究は、同ライフデザインイノベーション研究拠点「健康・スポーツプロジェクト」がめざす、地域住民が楽しんでスポーツ活動、安心した生活が送れるためのIoTセンシング技術の開発と、センシングにより得られたPLRをもとにした高度なマイニング技術の創出に資する「健康・スポーツPLR（Personal Life Records）」を泉州地域からも収集し、同地域のスポーツ・健康増進に寄与をめざしおり、本年度は、コロナウィルス禍もふまえ、本学所在地の熊取町とコロナウィルス禍も考慮しつつ、後述の測定ならびデータ収集の立案、調整を図っている。

R2-R4の目的：転倒・傷害予防のためのトレーニングプログラムの作成／転倒・傷害発生リスク評価のためのアプリケーションの開発



※ECC（Eccentric contraction）：伸張性収縮」の略。

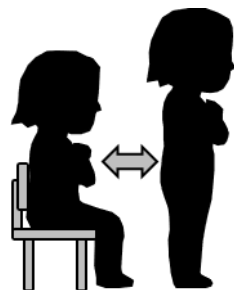




現在、このデータベースの中で30-60代の方が圧倒的に少ない状態です。
熊取町の職員の方を対象に測定会など開催することはできないでしょうか？

スクワット筋力

足にスマートフォンを取り付け、
椅子に立ち座りを5回行って頂きます。



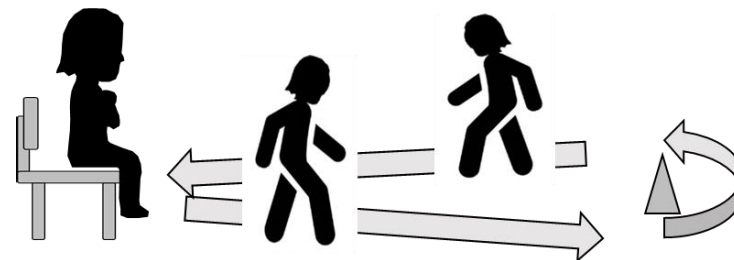
握力

握力を左右2回ずつ計測します。



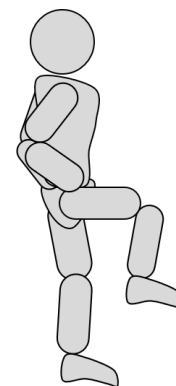
歩行能力

椅子から立ち上がり、
3 mの距離を往復するまでの時間を計測します。



片足バランス

開眼/閉眼での片足立ち持続時間を計測します。



(1) 地域活性化に向けた具体的な取組の推進

- ①「泉州スポーツ・健康資源実態調査」の企画・実施
- ②既存事業の充実・拡充
- ③新たな取り組みの企画・推進
- ④②、③の推進・展開を図る為のプロモーション計画の企画・立案・展開
- ⑤泉州アクティブライフマップの制作

③新たな取り組みの企画・推進

「新たな取り組みの企画・推進」は、新型コロナウイルス禍で、通常の教育・研究ならびに社会貢献活動に制限・制約下となったことから実現や推進は困難であった。

そこで、本事業においては、スポーツ・健康づくりの推進や展開について、先進事例や施策について、海外事例などを調査し、将来の泉州地域や本学が展開する取り組みの参考情報や知見の収集に取り組んだ。

海外のプロモーション事例

泉州地域におけるスポーツ・健康づくりの促進と展開にあたり、先進的またWEBコンテンツが充実した事例として、海外におけるプロモーション事例の調査を行った。

本調査をもとに、後掲の「アクティブ泉州」プロジェクトやWEBコンテンツである「泉州アクティブライフマップ」の企画・立案の参考とした。

海外のプロモーション事例の調査概要

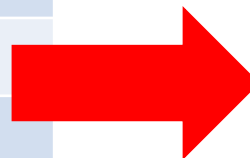
目的：海外のプロモーション事例を通じて、本プロジェクトのHP作成における参考資料とすること

対象：横浜スポーツ学術会議（2020）を参考に15の国及び州(表1)

調査方法：HPを閲覧し、HP名、組織、設立年度、ビジョン、具体的な取組について調査した

表1. 調査した事例一覧

ニュージーランド	オーストラリア ・ビクトリア州 ・西オーストラリア州
インドネシア	チリ
コロンビア	ベネズエラ
ブラジル	カナダ
シンガポール	インド
ジャマイカ	エクアドル
フランス	イギリス



項目	カナダ	イギリス	フランス
人口	3759万人	6643万人5600人	6281万4,233人
面積	9,984,670km ²	244,820km ²	551,500km ²
言語	英語、フランス語	英語	フランス語
政治体制	立憲君主制	立憲君主制	半大統領制の共和制
GDP	1兆6,024億ドル	1兆5478億UKポンド	2兆0377億ユーロ
スポーツ基本計画	①Canadian Sport Policy 2012 ②スポーツカナダ（民族遺産省の一部局） ③策定年 2012年6月 ④計画期間 10年間	①Sporting Future ②文化・メディア・スポーツ省 ③2015年12月	①Citoyens du Sport ②都市・青少年・スポーツ省 ③2015年3月
スポーツ実施状況	○15歳以上 ・週1回以上（1年間あるいは1年のうちの一定期間で）：26% 【15～19歳】：54% 【20～24歳】：37% 【25～34歳】：29% 【35～54歳】：23% 【55歳以上】：17% ※競技者・参加者としての実施を対象とし、レクリエーションや移動目的のサイクリング、ダンス、フィットネス、ジョギング、ウォーキングなどは含まない。 (General Social Survey, 2010)	○成人（16歳以上） Active（週150分以上）：60.7% 【男性】63.2% 【女性】58.5% Fairly Active（週30分以上149分以下）：13.7% 【男性】12.6% 【女性】14.8% Inactive（週30分未満）：25.6% 【男性】24.2% 【女性】26.7% ○障害者（16歳以上） Active（週150分以上）：35.7% Fairly Active（週30分以上149分以下）：13.7% Inactive（週30分未満）：50.6% (Active Life Survey, 2016)	○15歳以上 ・週1回未満：20% ・週1回：22% ・週1回以上：42% ・バカンス期間中のみ実施：5% ・非実施：11% (Enquete pratique physique et sportive, 2010)
クラブ加入状況	-	22.2% (Active People Survey, 2016)	1,610,752,957人 (Ministere des Sports, 2016)
スポーツクラブ数	-	約151,000	165859
スポーツ施設	-	82,558ヵ所 (Active Places, 2013)	269,497ヵ所 (RES, 2016年度)
ヘルスプロモーション活動名（HP）	Participation	change 4 life	MANGER BOUGER
運営組織	公的健康組織	Healthy Weight, Healthy Lives (2008) による政策によって設立 公衆衛生	公衆衛生フランス
HP URL	https://www.participation.ca	https://www.nhs.uk/change4life	https://www.mangerbouger.fr
事業の特徴	年齢や家族、趣味といったカテゴリー別に活動が紹介されており、ニーズに応じた活動ができる。また、30秒程度のプロモーションも掲載されている。	食事とスポーツに分類されており、それぞれに適した食事や活動が紹介されている。また、ディズニーとのコラボを通じて、子ども運動促進に取り組んでいる。	食事とスポーツに分類し、目的に応じた説明がある。スポーツを選択した場合、年齢ごとにカテゴリー化されており、さらに目的に合わせてスポーツが実施できる仕組みである。

国 : カナダ

HP名 : ParticipACTION

(<https://www.participaction.com/en-ca/>)

組織 : 公的健康組織

設立年度 : 1971年

ビジョン : 身体活動が日常生活の重要な部分となること

取組 : 多様なニーズに合わせた情報を掲載(年齢やスポーツ活動)



Age Better（年齢に関係なくよりよい生活）を選択した場合



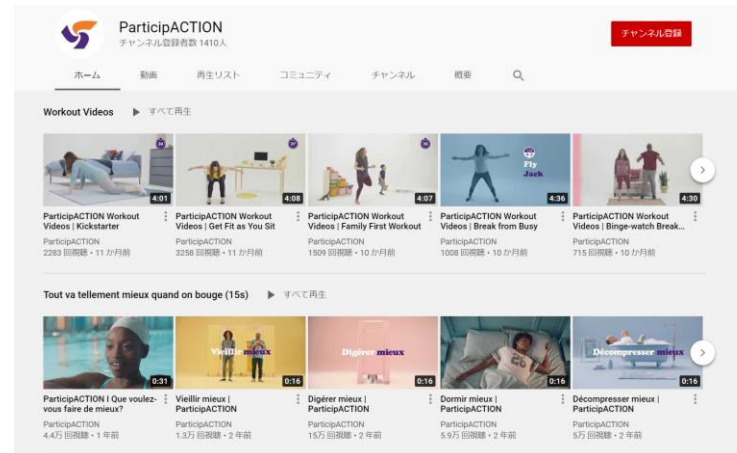
より健康的な明日のために、
今日より多く移動しましょうと啓発するメッセー
ジを掲出。

「健康的な未来への処方箋は身体活動です」

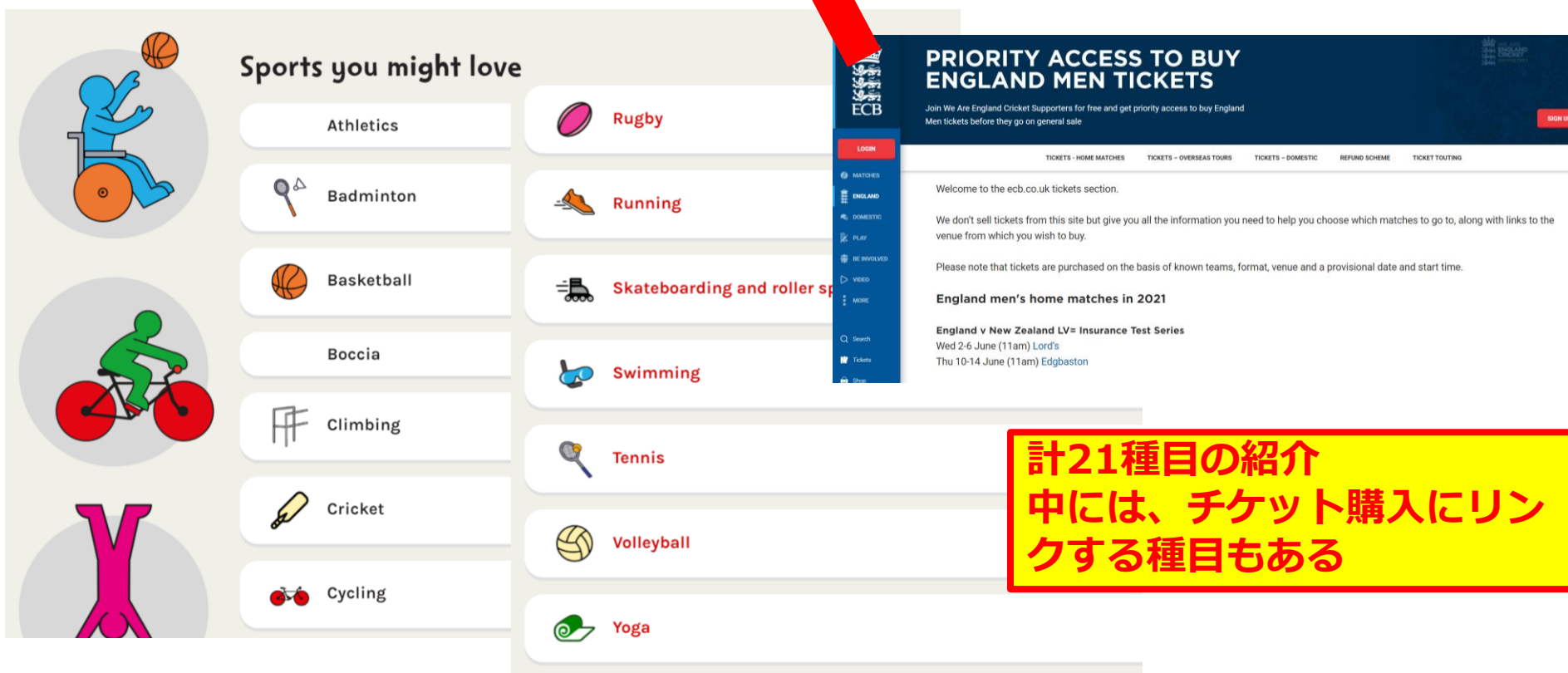
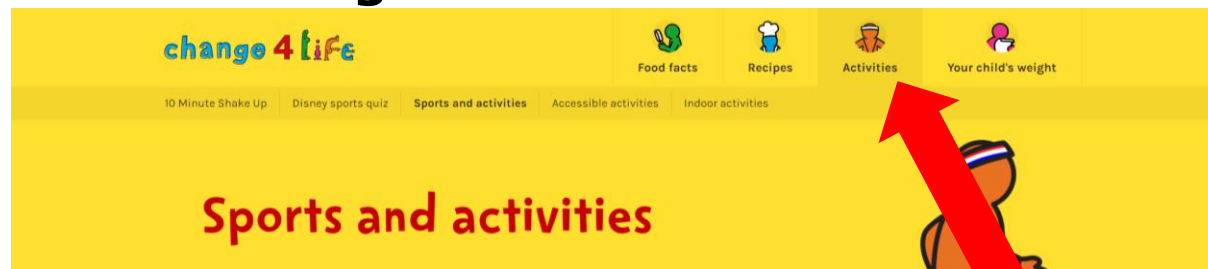
30秒のPR動画の掲載



YouTubeによって具体的な運動動画を発信

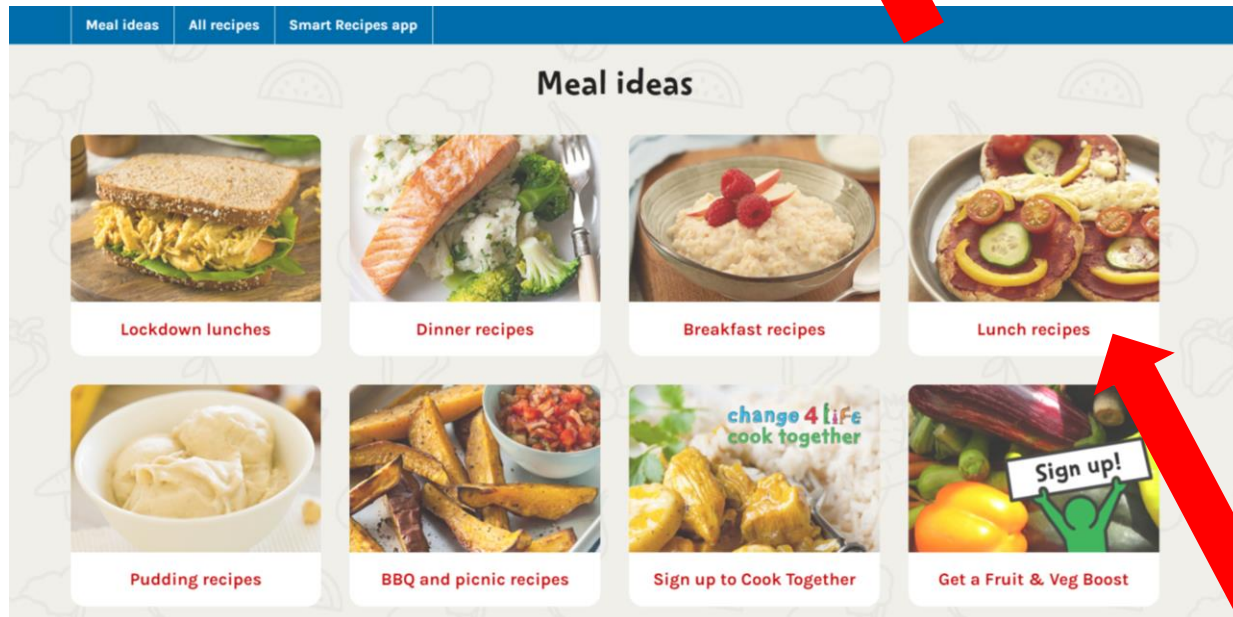
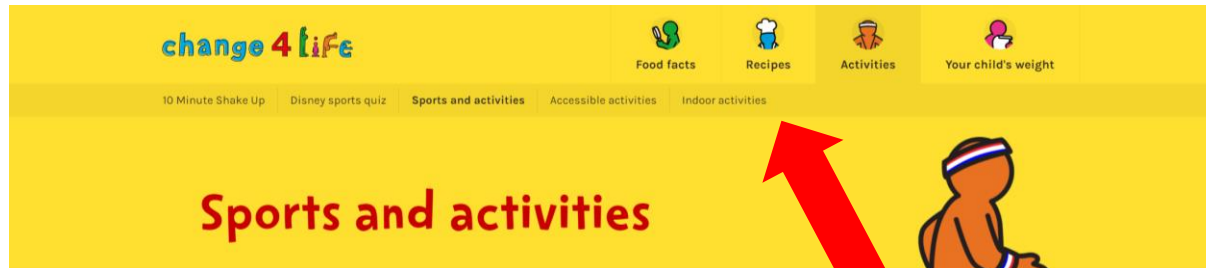


HP名 : change 4 life (イギリス)



計21種目の紹介
中には、チケット購入にリンクする種目もある

Recipesを選択した場合



Method



- 1 Put the flour, mixed spice, egg, grated carrot, yoghurt and milk into a large mixing bowl and use a hand whisk or fork to mix together thoroughly.


You could use white self-raising flour, but wholemeal has more fibre.

- 2 Stir in the sultanas (or raisins).
- 3 Heat a non-stick frying pan over a medium heat. Add 2 to 3 drops of oil. Cook tablespoonfuls of the batter in batches, turning them over after 1 to 2 minutes to cook the other side. Make 8 mini


海外のプロモーション事例【フランス】

Filter by:


Activity background ▾ Type of activity ▾ Profile ▾ **Filter**




Walking or playing with your dog
Leisure activity




Archery
Leisure activity




Bodybuilding
Leisure activity




Hiking
Leisure activity




Nordic Walk
Leisure activity




Scooter ride
Leisure activity



Dance
Leisure activity



Petanque
Leisure activity



Bodybuilding
Leisure activity

Nordic walking is a complete outdoor sport that puts the whole body into action by combining the characteristics of fitness and active walking. In practical terms, it consists of walking by accentuating the natural swinging motion of the arms and propelling the body with two sticks.

What are the benefits?

It allows for more complete muscle work than conventional walking. It is an endurance job that improves cardio-respiratory abilities and circulation. Sticks allow you to go faster and maintain your balance, while relieving joints. Finally, this activity also improves balance and oxygenates.

What equipment is needed?

You need comfortable, breathable clothing, a good pair of walking shoes and Nordic Sticks, soft, lightweight carbon fibre sticks - and of course a bottle of water or a bottle to stay hydrated.

Did you know that?

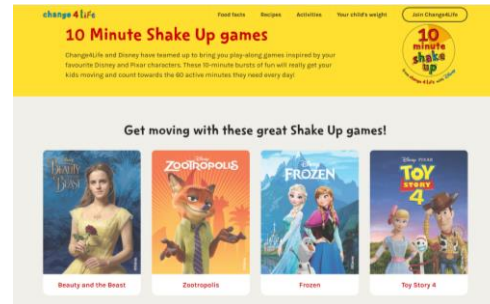
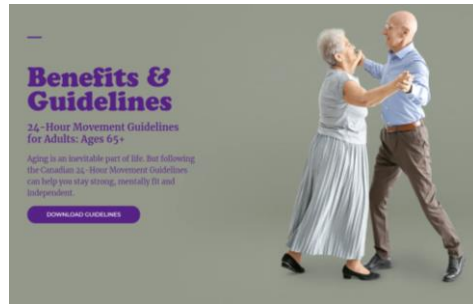
A session lasts between 1 and 2 hours, always starts with warm-ups and ends with stretching.

☒ I'm doing ☐ I'd like to do

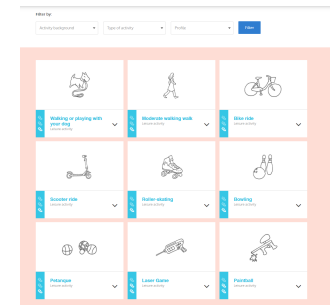
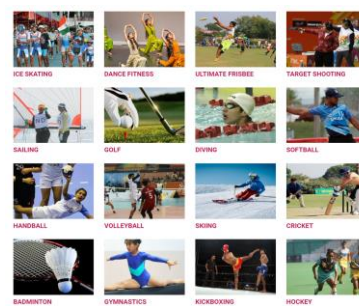
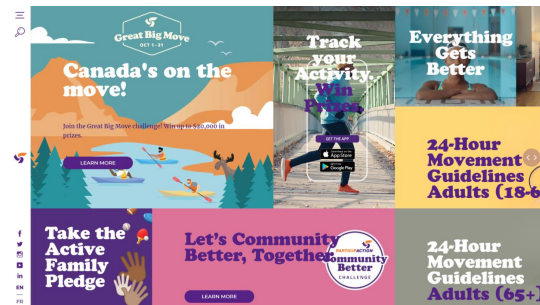
○種目検索
○強度
○必要な道具

海外のプロモーションで使用されるホームページにおいて参考になる点

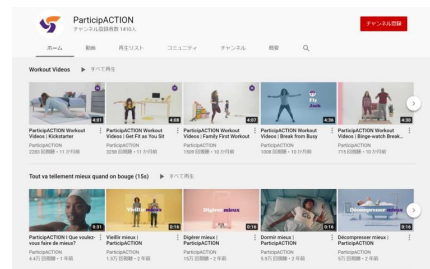
✓ 健康維持増進に向けて取り組みやすい視点での発信



✓ 多種多様なスポーツの紹介、得られる効果や強度・道具の紹介



✓ 活動の紹介では、動画を加えて活動やレシピの紹介



(1) 地域活性化に向けた具体的な取組の推進

- ①「泉州スポーツ・健康資源実態調査」の企画・実施
- ②既存事業の充実・拡充
- ③新たな取り組みの企画・推進
- ④②、③の推進・展開を図る為のプロモーション計画の企画・立案・展開
- ⑤泉州アクティブライフマップの制作

②、③の推進・展開を図る為のプロモーション計画の企画・立案・展開

②、③の既存事業や新規事業の今後の展開のための施策「アクティブ泉州」プロジェクトの展開方法について、検討を行った。

「アクティブ泉州」プロジェクトは、鳥内（2007）が「人々の健康的な生活習慣形成は、科学的な証拠Evidence Based Medicine（EBM）に基づくと共に、ライフコースの中で生じる人々の様々な日常的諸経験や物語Narrative Based Medicine（NBM）にも基づいてつくられている。健康社会学では、この健康的な生活習慣の形成過程を「健康の社会化Health Socialization」と呼んでいる。」と指摘するような、スポーツや健康科学の根拠や専門家が示すエビデンスや研究成果にもとづく知見や助言や情報提供などにもとづき、自ら積極的に、自身の身体活動やスポーツ活動、健康づくりの主体性の醸成や、住民の活動促進をめざしている。

（参考文献）「人々の主観的健康観の類型化に関する研究（鳥内憲夫）順天堂医学2007,53,p.410-420」

そこで、本校では、専門的な助言や知見、情報を得ることができるWEBコンテンツの企画と制作を行い、それを展開するための行動変容のひとつの仮説を立案し、次年度以降の「アクティブ泉州」プロジェクトの展開の一助とした。

なお、同プロジェクトのメイン施策の「泉州アクティブライフマップ」については次項で後掲し、プロジェクトの一貫として、泉州地域の「ゆるキャラ」の活用などの検討は行った。

「アクティブ泉州」プロジェクトについて

「アクティブ泉州」は、前掲のとおり、人々の日々の生活において、自ら主体的、積極的に、身体活動やスポーツ活動、健康づくりに取り組む意識や行動の変容を促すプロジェクトをめざしている。

日常、運動やスポーツ活動を主体的に取り組むためには、人々の個々の意識やその強さだけに依拠するだけでは難しいことは、自明である。アメリカの心理学者J・J・ギブソンが提唱する認知心理学における概念「アフォーダンス理論（Affordance）」は、「与える・提供する」という意味の「アフォード（afford）」という言葉から名付けられた造語で、物が持つ形や色、材質などが、その物自体の扱い方を説明、体現していれば、人間の行動もそれにより自然と導かれるというようなデザインや企画の在り方を示している。

例えば、ゴミ箱の捨てる口の形が、捨てるモノに近い形でデザインされていたり、駅や道路のサイン看板や標示が文字情報が少なくてもグラフィックの形状や色などの工夫や意匠で、より明瞭に行き先や目的地点を指示・誘導されているような施策は、この概念を援用し、人々の行動をデザインしている。

マーケティングや広告の領域でも、**AIDMA（アイドマ）**、**AISAS（アイサス）**と言われて久しいように、人々の行動の起点は「Attention：注目」が第一である。本プロジェクトでも、そのためのメッセージやキャッチフレーズ、またアイコンや統一したデザインなどを企画立案することが重要である。今回のプロジェクトでは、先述のとおり、十分な調査や先行例などを挙げるのが困難であったため、一旦は仮案として後掲するような「趣意書」「メッセージ」「デザイン」の各案を列挙し、次年度以降の展開のたたき台とした。

■**AIDMA（アイドマ）**：1920年代にアメリカの作家、サミュエル・ローランド・ホール氏によって提唱された概念。ユーザーの購買決定プロセスを説明するためのフレームワークのひとつで、Attention：注目、商品やサービスについて知る、Interest：興味を持つ、Desire：欲しいという欲求、Memory：記憶、Action：購買行動、の5つのキーワードの頭文字をとって名付けられた。

■**AISAS（アイサス）**：Attention：注目、商品やサービスについて知る、Interest：興味を持つ、Search：検索、Action：購買行動、Share：共有する、といったインターネットによる購買行動の主流化をふまえた行動変容のフレームワーク。

みんなのアセが、まちを潤す。

“SPORTS” はラテン語で「運び去る、運搬する」を意味する“deportare”（デポルターレ）が語源とされており、そこから転じて「日々の憂いから離れて気晴らしをする」という本質的な意味が含まれています。つまり「競技」という側面だけではなく、誰もが自由に体を動かし、楽しむことで、ストレス解消や生活の充実度向上に貢献し、ひいては心身の健康の維持、健康寿命の延伸に貢献するという作用が、スポーツにはあるのです。

大阪体育大学では、そんなスポーツの本質や魅力を尊重し、本学が有する経営資源を存分に活用して、拠点とする泉州地域で「スポーツと健康のまちづくりの推進」を実現するための『アクティブ泉州』プロジェクトを企画・推進します。

日常の中での身体を動かす活動を、科学的なデータや知見をもとに正しい方法で啓発。様々な年齢層、バックグラウンドに応じたスポーツの楽しみ方を促進することで、運動・スポーツを通じた泉州地区の豊かでアクティブな暮らしの実現を牽引していきます。

【プロジェクトの目的】

- 様々な年齢層、社会的背景に応じた、心身の健康に貢献する身体活動の促進
- スポーツを通じた、まちづくりへの貢献
- 泉州地区の「健康寿命」の延伸
- 泉州地区での成功をベースとした、各地で活用可能な「アクティブライフの普及」に向けたスキームと体制の確立



A



「ACTIVE SENSHU」の拠点づくりの展開によって、13都市にスポーツを通した新たな繋がりが生まれ、道ができ広がっていくイメージをプロジェクトの頭文字「A」「S」で表現。

B



「ACTIVE SENSHU」の拠点づくりの展開をタイポグラフィで表現。

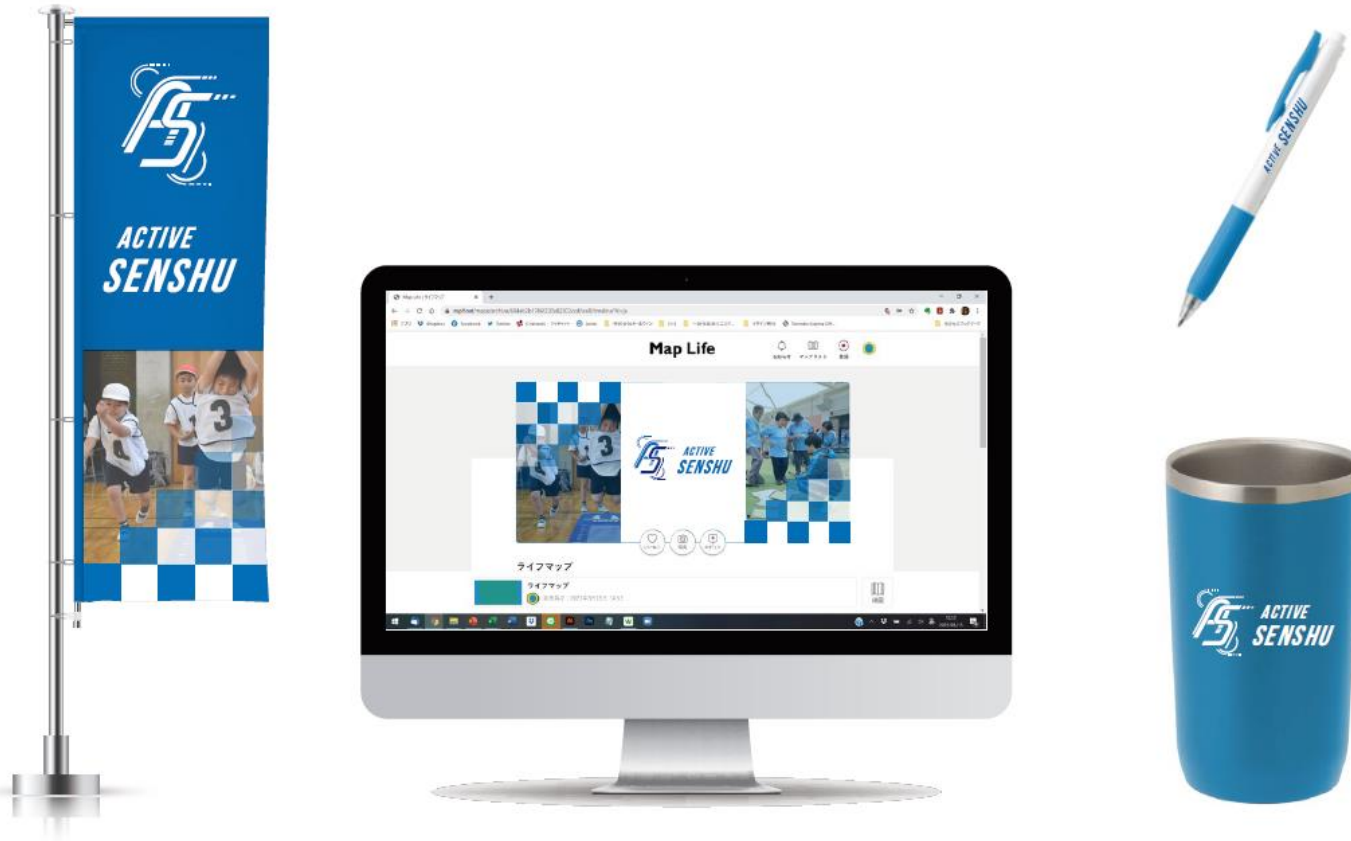
C



「ACTIVE SENSHU」の展開によって、地域の人たちが活動的になり、さらに生き生きと生活していく姿を「sports」「泉州」の頭文字「S」を用いてマーク化。また、大阪体育大学の「大」をモチーフに、繋がり拡大という願いを込めました。

「アクティブ泉州」のデザイン展開例（デザインはA案を用いて制作）

展開イメージ



「アクティブ泉州」におけるカスタマージャーニーの検討

カスタマージャーニーとは、マーケティング用語で、商品やサービスの販売促進において、その購入または利用する人物像を設定し、その行動、思考、感情を分析、「認知」から「検討」「購入・利用」へ至るシナリオを時系列で捉える考え方である。カスタマージャーニーを設計するためのツールをカスタマージャーニーマップと言う。下表は、あくまで以下の人物像（ペルソナ※）を仮に設定し、案として立案したものである。

※ペルソナ例：40代後半の男性・既婚者・家族構成（本人・妻・二女（中学2年、小学4年））・学歴（大卒）・職業（会社員）

段階	Attention：注目	Interest：興味・関心	Search：検索	Action：購買行動	Share：共有
顧客心理	コロナ禍で在宅ワークが長期化、運動不足とストレスによる過食でコロナ太りを気にしており、ダイエットを意識が芽生え始めていたところ。	いよいよ、妻や多感な娘達からダイエットを指摘されたところ、偶々の通勤の路上で「アクティブ泉州」のロゴがプリントされた幟を見かけて、気になって帰宅した。	夕食までの間で自宅PCで残務整理と、明日の在宅ワークの準備をしていたところ、「アクティブ泉州」を思いだし、WEB検索で公式HPを閲覧、身近な住居地域である泉州エリアでの活動が紹介されていた。	公式HP掲載の自宅近くの5kmのウォーキングコースでイベントが開催。参加してみたら、森林を抜けるコースで気持ち良く、途中写真も撮影した。参加賞のノベルティももらえ、大変、お得で幸せな気分となった。	早速、自身のSNSで写真と共にコメントをUP。オススメとしたところ。知人などから「いいね」、もらえ、次回は妻や子ども達も誘ってのジョギング&ハイキングの計画を思いつく。
顧客接点		幟旗 	WEBコンテンツ 	ノベルティ 	SNS 

次年度に向けては、調査なども参照にしながら改めて「アクティブ泉州」がリーチを目指す様々なターゲットに対してのペルソナを設定し、顧客心理の分析、施策の検討を図る必要がある。

(1) 地域活性化に向けた具体的な取組の推進

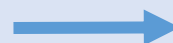
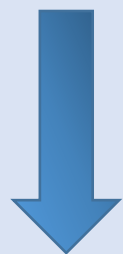
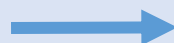
- ①「泉州スポーツ・健康資源実態調査」の企画・実施
- ②既存事業の充実・拡充
- ③新たな取り組みの企画・推進
- ④②、③の推進・展開を図る為のプロモーション計画の企画・立案・展開
- ⑤泉州アクティブライフマップの制作

大学の有する資源；
人的（学生・教員）・知的（研究成果・専門領域）・施設（体育館・グラウンド）



泉州地域の資源
スポーツ施設（体育館・グラウンド・プール・ジム）、レジャー施設、
ジョギングロード・文化的コモディティ（寺社仏閣・だんじり・繊維産業）

効果的な
プロモーション



人材育成
(戦略的価値共創)

スポーツ実施率の向上
65%の達成を目指して

大阪体育大学では、様々な社会貢献活動を実践しており、多くの方々にご参加いただいている。しかしながらその中には対象者を限定しているものや、事業そのものが知られていないものもあることが考えられる。大学の資源を活用した地域活性化を考えるにあたり、まずは本学で実施している事業を知らせる努力を行い、より多くの方々に知っていただき、ご参加いただく努力をする事が必要である。

大阪府泉南郡熊取町 中学校部活動スポーツ指導者派遣事業



「“熊取町×大阪体育大学” DASHプロジェクトに関する協働協定」（2018年3月2日締結）に基づき、熊取町立中学校を対象に本学のシンボルとも言える運動クラブ所属の学生が、当該校のニーズや指導方針に沿って、スポーツ指導を実践した。2020年度は、剣道、野球、バスケットボール部への派遣を予定しています。

大阪府泉南郡熊取町 健康寿命延伸や医療費等の削減に向けた取り組み



本学所在地の熊取町では「くまとりタピオ元気体操」を本学教員が考案・普及展開、加えて「体力若返り講座」「体力測定方法の研修」など、様々な取り組みを展開し、町民の身体活動機会の創出や、それらの活動を促すボランティア人材の育成・研修などに取り組んでいる。これらの取組を通じ、体力増進や維持、医療費の抑制効果の創出についての調査分析に協働で取り組んでいます。

子どもスポーツクラブ 「キッズボーシャーズ」



子どもを取り巻く諸問題を解決することを目的に、本学教員、学生が指導を行っている。
2018年度は、前期（4月17日～7月10日の全13回）は「ボール運動」や「基礎運動」、後期（9月25日～12月18日の全13回）は「サッカー」を行った。
会員数は、2019年3月30日現在で56名。

子ども運動教室

（3～7歳くらいまでの父兄同伴で参加できるこども）



3歳から小学2年までの運動が苦手な子どもやハンディキャップのある子どもを対象とした運動教室を2018年度に前後期・各10回開催。健常者と障がいがある子どもたちが一緒に学び、楽しめる運動教室を基本理念とし、基本動作の習得と、それぞれの問題点の把握および課題のクリアを目的とした。また障がいのある子どもの保護者に不安要素をヒアリングしながら、それぞれに適した運動プログラムで弱点の克服と体力の向上を図った。

泉大津市・子ども体力向上プロジェクト



泉大津市朝日小学校の児童46名を対象に、放課後の時間を利用し競技力の向上やスポーツ習慣の定着化をめざした定期的なスポーツプログラムを、2018年5月から全26回実施した。指導はVプレミアリーグ堺ブレイザーズを特別講師とし、本学OG、教員、学生が務め、初回と最終回にはスポーツ科学センターによる体力測定も実施した。その他、同プロジェクトでは、参加体験型スポーツ教室、講習会など多彩な事業を企画・展開している。

OUHSスポーツキャンプ（小学生を対象としたスポーツクリニック、一般成人を対象とした健康教室など）



本学周辺地域の交流やスポーツの楽しさを知ってもらうことを目的に、各クラブの教員(部活動指導者)が指導し、部員が補助にあたるイベントを開催。本学の学生が中心となり「総括」「マネジメント」「プログラム」「スポンサー」「参加者・広報」の各部署に分かれ企画・運営を行い、スポーツ指導とスポーツマネジメントの実践の場とした。2019年2月24日の開催では「サッカー」「テニス」「健康増進」のプログラムに111名が参加した。

体力若返り講座



地域に暮らす中高齢の方々が安全かつ効果的に運動を継続できるよう支援するとともに、中高齢者自身が自立して健康づくりに関する活動ができる体制づくりにもつながる公開講座を開催。知の拠点として、住民の生涯学習や多様な活動のサポートを実践しています。

障がい体験授業（車いす体験授業・白杖体験授業など、小学校教員を対象）



熊取町内の小学校に対し、福祉教育（障害体験）を目的とした出前授業を提供しました。出前授業では、小学校の要望に応じて、車いす体験とアイマスク体験の2つの授業から選択していただき実施しています。車いす体験は、車いす利用者の気持ちを考えること、車いすの使い方を知ることなどをテーマにしています。授業では、車いすで段差を越えたり、坂道を通行したりしました。アイマスク体験は、視覚障害者の理解とガイドの方法を知ることなどをテーマにしています。授業では、二人一組で一人がアイマスクを付け、一人がガイドをする体験を行いました。

プロモーションに向けたホームページの作成

本学教員の専門分野に合わせ、「アクティブ泉州」の各コンテンツを、専門知見を踏まえた紹介者として推薦メッセージを提供、作成した。

事業メンバー（教員）（※責任者・副責任者以外の掲載順は、氏名の五十音順に掲載）

役割	氏名（※）	役職	専門分野
責任者（プロジェクトリーダー）	富山 浩三	体育学部 教授・社会貢献センター長	スポーツマネジメント（地域スポーツ振興）
副責任者（プロジェクトサブリーダー）	中山 健	体育学部 教授	スポーツ社会学
プロジェクトチーム・メンバー （シニアスポーツ・健康づくり）	池島 明子	体育学部 教授	レクリエーション、健康づくり、介護予防
プロジェクトチーム・メンバー （アウトドア・野外活動）	伊原 久美子	体育学部 准教授・広報委員	レクリエーション、野外教育
プロジェクトチーム・メンバー （アダプテッドスポーツ）	植木 章三	教育学部 教授・教育学部長	公衆衛生学、応用健康科学、アダプテッド・スポーツ科学
プロジェクトチーム・メンバー （体力科学）	梅林 薫	体育学部 教授・学長補佐（国際交流） スポーツ科学センター長	体力科学、運動生理学、コーチング学
プロジェクトチーム・メンバー （アダプテッドスポーツ）	金子 勝司	教育学部 教授・広報委員	レクリエーション、健康社会学
プロジェクトチーム・メンバー （メンタルサポート）	菅生 貴之	体育学部 教授	メンタルトレーニング、スポーツカウンセリング、ゴルフ
プロジェクトチーム・メンバー （スポーツ指導・コーチング）	曾根 純也	体育学部 教授	運動学、サッカー
プロジェクトチーム・メンバー （アウトドア・野外活動）	徳田 真彦	体育学部 講師	野外教育、レクリエーション
プロジェクトチーム・メンバー （スポーツビジネスの助言）	徳山 友	体育学部 准教授	スポーツマーケティング、スポーツ消費者行動、スポーツ消費者の細分化
プロジェクトチーム・メンバー （シニアスポーツ・健康づくり）	友金 明香	体育学部 講師	健康づくり、体力学
プロジェクトチーム・メンバー （スポーツ医学）	前島 悦子	体育学部 教授・大学院研究科長 公益財団法人日本体育協会公認スポーツドクター	スポーツ医学
プロジェクトチーム・メンバー （発育・発達）	三島 隆章	体育学部 教授	運動生理学、発育発達学

本学では、本書や本事業で掲載できていないその他の社会貢献や地域活性化活動が多数あります。既存事業についての個別の担当メンバーや体制の掲載は省略しております。上記メンバーは、今回の公募事業「大学のスポーツ資源を活用した地域活性化拠点形成事業」の推進にあたり、新規事業の推進や自治体からの個別に助言を求められる場合の専門別のアドバイザーとして、プロジェクトメンバーに掲載しています。

アクティブ泉州カテゴリー（例）

本学教員の専門分野に合わせ、「アクティブ泉州」の各コンテンツを、専門知見を踏まえた紹介者として推薦メッセージを提供、作成した。



子どもの競技力を高める



いろいろなスポーツに取り組む



年長者のスポーツ参加



障がい者のスポーツ参加



ファミリースポーツ



アウトドアスポーツを楽しむ



レクリエーションを楽しむ



トレーニングに取り組む

スポーツで体も心も健康に

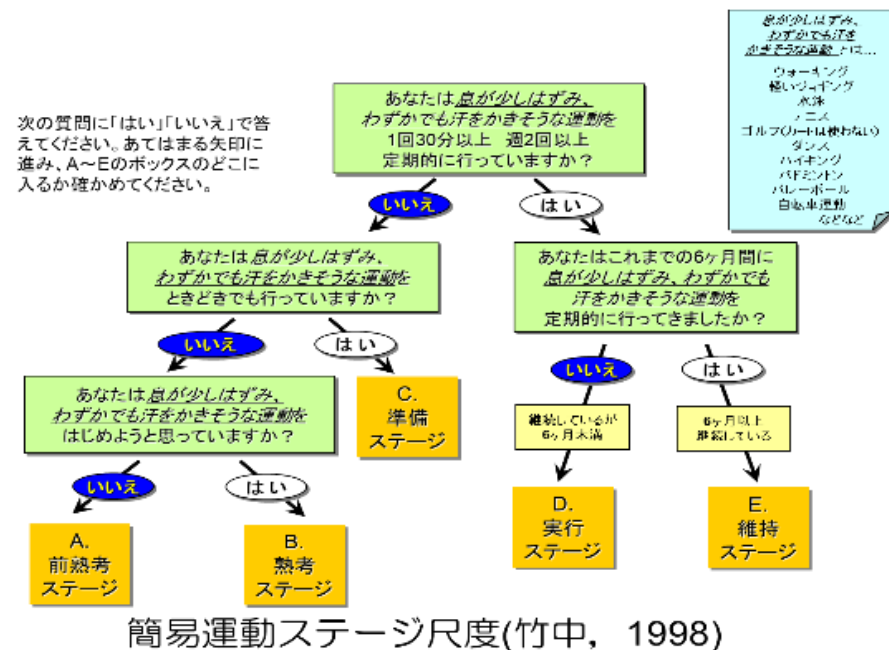
「スポーツをするのは楽しい」「運動を続けて行けば太らないし、健康的だ」ということは、よく言われていることですね。スポーツは心理的なストレスを下げてくれたり、「自分もやればできる」という自信を与えてくれたり、といった心理的効果もよく言われています。でも、「暑い(寒い)中で体を動かすのはおっくうだなあ、」とか「体育は得意じゃないから」といった理由で、なんとなくスポーツに踏み込めないこともよくあることです。

でも、思い浮かべてみてください。春の温かい日差しの中で、泉州地区に広がる山や海の自然の恵みの中を、仲の良い人と散歩するのはとても気分がよいですね。また、お子さんが自転車に乗る練習をしている時には、親御さんも一緒になって公園を走り回って、みんなが楽しい笑顔になるはずですよ。私たちは、体を動かすことがとても楽しく、またそれがいろいろな面で人生を豊かにしてくれることも経験的に知っているはずです。

では、なぜスポーツを始めることはおっくうに感じてしまうのでしょうか？ 右図の尺度を見て、皆さんが運動を行おうと思っている「度合い」を考えてみてください。Aの「前熟考ステージ」はまだ運動を始めようとも思っていない段階、Eの「維持ステージ」はかなり継続的に運動をされている段階です。皆さんは今の時点でどのあたりのステージにいますでしょうか？

例えばEステージにいる人に、Aステージの人が「スポーツはとてもいいものだから、あなたも明日から一緒にジョギングしましょう！」と言われたら、それはそれはとてもおっくうに感じてしまいますよね。「あなたのように毎日走ってたら、体がボロボロになっちゃうよ…」と怖気づいてしまうかもしれません。

大事なことは、それぞれのステージにあった刺激を、適切に選ぶことなのです。Aステージの人にいきなり「フルマラソンにチャレンジ」ではなく、「とてもよく似合う、カッコいいシューズを買う」という刺激だったらどうでしょうか？ B段階に行ったら、そのカッコいい靴を履いて、ちょっと近所を散歩してみようか、という刺激でもいいかもしれません。Cステージまで行ったら、ちょっとジョギングセミナーに参加してみようかな、となるかもしれません。ステージがあるにつれて、刺激や目標を少しずつ高めて行ってもよいですし、毎日の継続を大事にして同じことを続けていくのもよいと思います。



簡易運動ステージ尺度(竹中, 1998)

大事なことは、それぞれのステージにあった刺激を、適切に選ぶことなのです。Aステージの人にいきなり「フルマラソンにチャレンジ」ではなく、「とてもよく似合う、カッコいいシューズを買う」という刺激だったらどうでしょうか？B段階に行ったら、そのカッコいい靴を履いて、ちょっと近所を散歩してみようか、という刺激でもいいかもしれません。Cステージまで行ったら、ちょっとジョギングセミナーに参加してみようかな、となるかもしれません。ステージがあがるにつれて、刺激や目標を少しずつ高めて行ってもよいですし、毎日の継続を大事にして同じことを続けていくのもよいと思います。

「スポーツ」というと多くの人が「体育会系」の激しいものや、やせるための苦しいエクササイズを想像しがちですが、先ほどの尺度にあったように、本来人の心や体が健康であるための運動では、そのようなものは必要ありません。

適切な刺激かどうか、ということを、ウォーキングを例にして考えてみましょう。以下のようなことをできるだけ達成できるように運動の内容を考えます。

1. 楽しくなるよう工夫する。（カメラをもって景色を撮影しながらウォーキング）
2. 目標を設定する。（休憩を入れながらでいいので、30分は歩こう！）
3. 運動の結果や効果を確認できるようにする。（歩いた距離と心拍数をスマートウォッチで記録）
4. 成功体験を増やすために目標設定を調整する。（今月は忙しいから、月間の歩く距離目標をちょっと減らしておこう）

つまりは、あくまでも大事なものは、自分が快適で楽しいと感じることを継続していくことです。それから最後にもう一つ大事なことは、

5. できるだけ自己選択・自己決定する。

ということです。自分でやることを、誰かにやらされたり、誰かがすごく頑張っているから自分もやらなきゃ、という感じになるのではなく、自分でやれることをやればよいのです。泉州地区には、こうしたウォーキングやジョギングをするための自然にあふれています。また、もう少し仲間と一緒にやってみたい、という方にもおすすめの施設がたくさんあります。まずは、自分が関心のあるスポーツの雑誌やホームページをのぞいてみて、スポーツの扉を開いてみませんか？

【参考文献】 竹中 晃二 編（1998）健康スポーツの心理学．大修館書店

竹中 晃二 編・財団法人 日本体育協会 監修（2005）身体活動の増強および運動継続のための行動変容マニュアル．Book House HD

教員による推薦コメント：アウトドア活動（伊原 久美子）

「そこに山があるから」・・・世界最高峰のエベレスト初登頂を目指したイギリス人登山家ジョージ・マローリーが、
「なぜ、あなたはエベレストに登りたかったのか？」と問われて答えた言葉です。

★アウトドア活動の3つの楽しみ方

アウトドアとは一般的には「屋外」を指しますが、ここでは、“自然の中でのさまざまな活動”として紹介したいと思います。アウトドア活動と言えば、キャンプ、山登り、BBQ、海水浴、釣り、スキーなど自然の中での活動全般を指します。ここ泉州地域は、山も海も川もある自然豊かな地域ですので、アウトドア活動には最適な場所と言えるでしょう。アウトドア活動には、大きく3つの楽しみ方があります（図1）。

レジャー志向型は、家族や友人、会社の仲間たちと心身のリフレッシュや健康増進、趣味、生きがい、親睦を深める、豊かな人生としての楽しみ方です。スポーツ志向型は、山を走るトレイルランニングやスキーなどで自分の体力の限界に挑戦したり、他者と競争することで達成感や爽快感を味わう楽しみ方です。教育志向型は、アウトドア活動を通して青少年の育成や組織の成長などを目指す取り組みです。

アウトドア活動には、レジャーやスポーツ、教育と、さまざまな楽しみ方や活用の仕方があり、ここ泉州地域には、それらを実施できる施設がたくさんあります。



図1 アウトドア活動の志向による分類

★アウトドア活動をたくさんしている子どもはどんな子？

- 国立青少年教育機構の調査（H22、H26）によると、自然体験が多い子どもは、人間関係能力が高い（コミュニケーション能力が高い）
- 自己肯定感が高い（自分を認めることができる）
- 自立的行動習慣が高い（自分から行動することができる） ことが分かっています。

「そこに自然（アウトドア）があるから」・・・アウトドアへ出かけてみませんか？

教員による推薦コメント：トレーニング（梅林 薫）

トレーニング（training）とは、train（訓練する、練習するなど）の名詞形であり、今回は、ヒトの身体的パフォーマンスを速やかに増す目的で行われるものとして考えます。

身体的パフォーマンス、すなわち体力（行動体力）のことを表していますが、体力とは、一般的に、人間が生存し活動するために備わった身体的能力の総称で、行動体力とは、外部環境に働きかけて積極的にによりよく「生きていく」ために必要な体力のことを言います。さらに、行動を起こす能力（筋力、パワー）、行動を持続する能力（筋持久力、全身持久力）、行動を調節する能力（平衡性、敏捷性、巧緻性、柔軟性）の3つに分けることができます。目的別に考えた体力（健康のため、競技力向上のため）、種々のスポーツ種目にあった体力、また年齢区分（子ども、高齢者など）を考慮して必要な体力など色々と考えられるのが特徴です。

体力を向上するためにトレーニングをやみくもに行っては、効果はあまり期待できません。

体力トレーニングを効果的に行っていくにも、次の3つの原理に基づいて行う必要があります。

1. オーバーロードの原理（過負荷の原理）

トレーニングによって体力を高めるためには、トレーニングで用いる3条件（強度・時間・頻度）が、ある一定水準以上のものでなければ十分な成果が期待できない。例えば、最大筋力を向上させるためには、50回を持ち上げられる重さ（強度）では、増加が難しい。また、持久力向上をねらいとした場合、週1回の頻度でジョギングを実施しても、呼吸循環器系の改善は見られないなど。

2. 可逆性の原理

一度獲得されたトレーニングの効果は、トレーニングの中断によって逆戻りしてしまう。例えば、筋力トレーニングでつくり上げた筋力は、そのトレーニングを中止すると次第に元の状態に戻るなど。

3. 特異性の原理

トレーニングの効果は、トレーニングに用いた運動の種類や運動の形態によって異なって現れる。例えば、筋力トレーニングによって最大筋力は高まるが、呼吸循環系の能力は改善が見られないなど。

これらの原理に基づいて、必要とされる体力要素を向上していくこと、すなわちトレーニング方法を進めていくことが重要です。例えば、筋力を向上させるためには腕立て伏せなどの種目を、スタミナを向上させるためにはジョギング・ウォーキングなどの種目を強度、時間（回数）、頻度を考えながら進めていく必要があります。これらのことを意識しながら、競技力向上や健康維持・増進など目的に沿った形でトレーニングを進めていきましょう。

教員による推薦コメント：ファミリースポーツ（池島 明子）

◆スポーツ実施率向上のための行動計画（2018年 スポーツ庁発表）

⇒ひとりでスポーツを実施するよりもみんなでスポーツをする方が健康面での効果が高い

⇒コミュニティが広がる

◆「スポーツ」の語源は「デポルターレ」というラテン語で、「通常的生活から一時離れて遊ぶ・楽しむ・気分転換をする」という意味を持つ

⇒身体を動かすことに喜びや楽しさを感じたからこそ「スポーツ」に進化した

⇒「スポーツ」のある時間を家族と過ごし、エンジョイしてほしい

◆ファミリー（親子）でスポーツをするメリット

- ・子どもの成長を感じ取れる
- ・親子（ファミリー）のきずなが深まる
- ・共通の話題ができる

◆家族と行う運動・スポーツとして実施率が高いのは（スポーツライフ・データ2018より）

- | | | | | | | | |
|------|-------|-------|------|----------|---------|---------|---------|
| ①海水浴 | ②キャンプ | ③なわとび | ④スキー | ⑤キャッチボール | ⑥バドミントン | ⑦ハイキング | ⑧スノーボード |
| ⑨水泳 | ⑩卓球 | ⑪散歩 | ⑫登山 | ⑬ボウリング | ⑭釣り | ⑮サイクリング | |

⇒スポーツをするのは「家族と」は、女性が男性の倍で40代・50代に多い

※子どもの年齢（体力・興味）にあった種目で、かつ、「大人も楽しい」・「生涯スポーツ＝それぞれの体力や年齢、技術、興味・目的に応じて、いつでも、どこでも、いつまでも親しむことができるスポーツ」であることが望ましい

◆種目の例【おススメのニュースポーツ】

- ・ショートテニス：スポンジボールとシャフトの短いラケットを使用し、バドミントンコートでテニスに準じたルールで行う⇒テニスにつながる
- ・ターゲットバードゴルフ：ゴルフのサンドウェッジなど短いクラブとゴルフボール大のボールにバドミントンの羽根がついたプラスチック製の専用ボールでホールを狙う⇒ゴルフにつながる

「実施率が高かった種目」や「おススメのニュースポーツ」を参考に、興味のある種目・これなら教えることができる種目を「親から子を」「子から親を」誘って、ファミリーで一緒にしましょう！！

皆さん、レクリエーション活動を通して、心も身体も元気になりましょう！

私たちは、仕事の忙しさや人間関係の不調などを経験すると、気力が抜け、ぐったりするなど、「心が萎える」状態になりますね。これは、誰もが経験することで、その程度は人によっても、場面によっても異なります。そんな時、多くの人は意識して休養したり、楽しい時間を過ごすことで心の元気を回復し、「やる気」を感じます。やる気とは「進んで物事を行おう」という気持ちです。こうして、心の元気を回復させ、やる気を出させることで、気晴らしになることを探して取り組んだり、気の合う仲間と集まる時間をつくるなど、行動が積極的になります。積極的な行動を通して、楽しさを感じる機会が多くなり、心はますます元気になっていきます。こうした好循環を創るために、レクリエーション活動はとても有効な活動です。

レクリエーション活動は…

①コミュニケーションの促進に役立ちます

ほとんどの人が学校や職場でレクリエーションとして行われるさまざまな行事・活動に参加した経験があると思います。クラスの仲間とゲームやスポーツをしたり、職場の仲間とハイキングや小旅行にでかけたり、趣味活動を行ったり、行事や活動の中で言葉を交わし、親しくなり、お互いを理解していきます。

②健康づくりに役立ちます

普段あまり運動をしない人や運動が苦手な人にとって、いきなりスポーツを始める事自体ハードルが高くなると思います。その点では、レクリエーション活動は、気軽に、楽しく、適度な運動ができるためからだを動かす気持ちよさの実感と、仲間づくりに適したツールです。心の健康、身体の健康、どちらにも役立ちます。

③地域づくりに役立ちます

地域の餅つき大会など、季節行事やお祭りなどを通して、高齢者や子ども、障がいのある人、外国人など多種多様な人々との繋がりをつくることによって、世界各国の文化を知ることや、相互理解を図ることができたり、きずなを深めることができたり、地域文化を継承など、様々な効果が期待できます。その結果、いきいきとした地域づくりに役立ちます。

総じて、

レクリエーション活動は、Quality of Life（生活の質）を高め、一人ひとりのより良い生き方に繋がるとともに、生き生きとした社会づくりに貢献します。

【レクリエーション活動が意欲を高める???】

人の脳の活動は、一般的に勉強や仕事中に比べて、ゲームやスポーツ、歌やダンス、クラフトなど、レクリエーションを楽しんでいるときの方が“意欲”が高まりやすいことが分かっています。それは脳の内側にある意欲を司る“線条体”という部位が活発になり、快感に関わるドーパミン神経系と強く結びつき、レクリエーションなどの、特に意識せずにできることに気持ちよさを感じ、それが意欲にも繋がっているという研究結果が出ています。

（公益財団法人日本レクリエーション協会の情報誌「Rec-site」掲載）

【レクリエーション活動が脳を癒す???】

人は、考えたり、実行したり、活動を起こす時に、脳の前頭葉が活性化します。とりわけ勉強や仕事は、一生懸命に頭を使うため、前頭葉はなかなか沈静化しません。一方で、レクリエーションは、ルールや動きなど基本的なことを覚えれば、気楽に楽しむことができるため、前頭葉が沈静化し、線条体の活動が高まります。前頭葉の活動が沈静化することは、人にとって、脳を休める“癒し”になります。

（公益財団法人日本レクリエーション協会の情報誌「Rec-site」掲載）

スポーツで成功を収めるために必要な要素の一つに体力・運動能力を上げることができます。例えば、世界各国のサッカークラブや代表チームにおいて、選手評価や選抜の目的で体力テストを行う場合、必ず短い距離でのスプリント走（直線走）が一項目として実施されています¹⁾。したがって、競技力を高めるためには、自分が行っているスポーツに必要な体力・運動能力を高める必要があります。では、いつ頃から体力・運動能力を高めるような取り組みを行うべきなのでしょう。同一被験者を対象に年長時と小学6年時に行った体力テストの関連性を検討した結果、幼児期の体力・運動能力の特性が児童期後期まで少なからず影響を及ぼし、特に静的筋力、跳躍力および投能力に関しては年長時から小学6年時までの持ち越し効果の程度が高かったことが確かめられています²⁾。また、幼児期に体力・運動能力のレベルが低い場合、男子では後に運動部に所属したとしても大きな挽回は困難を伴うことから、幼児期から体力・運動能力を高めるための取り組みを行うことが重要であることも示唆されています²⁾。発育とともに体力・運動能力はある程度自然に発達を遂げますが、ある体力・運動能力が著しく発達している時期にその体力・運動能力を養うトレーニングを行うと、より大きなトレーニング効果を得ることができることも示唆されています³⁾。したがって、子どもの頃から体力・運動能力を高める取り組みを行うことは、たいへん重要だと考えられます。そこで、子どもの競技力を高めるための時期とポイントについて下記の通り示したいと思います。

1. 第1期（男女：～8歳）

著しい神経系の発達、体力・運動能力の発達に寄与している可能性が高い時期です。また、走力や敏捷性だけでなく、様々な体力・運動能力が著しく発達する時期でもあります。そこで、第1期のトレーニングのポイントとしては、素早い動きや動きの習得を目的とした運動を取り入れる必要があります。また、運動だけでなく遊びも加え、様々な動きを取り入れながら身体を動かす時間を確保する必要があります。

2. 第2期（男子：9～12歳，女子：9～10歳）

体力・運動能力の発達が一時的に停滞だけでなく、感覚運動の制御が後退したり、運動のぎこちなさが生じる期間です。また、プライオメトリックトレーニングが体力・運動能力の向上に効果的である可能性があります。

3. 第3期（男子：13～15歳，女子：11～13歳）

男女ともに思春期を迎えますが、思春期に分泌量が著しく増加するテストステロンが遅筋線維よりも速筋線維の肥大に強く作用することから4）、相対的に遅筋線維が減少し、速筋線維が増加します5）6）。そこで第3期では、男女とも自重での筋力トレーニングを導入するのに適した時期であるといえます。また、女子は見かけ上では体力・運動能力の発達に停滞しますが、筋力は向上していることから、体脂肪の極度な蓄積に注意することで体力・運動能力の低下は避けることができる可能性があります。

4. 第4期（男子：16歳～，女子：14歳～）

第4期では第二性徴期が終わりを迎え、体力・運動能力の発達も終わりを迎えることもあり、専門的なトレーニングを導入し始めるのに適した時期であるといえます。

（参考文献）

- 1) 星川佳広，飯田朝美，古森政作，中馬健太郎，澁川賢一，菊池忍（2012）サッカー選手における20m走タイムの評価表の試案：ジュニアからプロまでの検討．体育学研究，57，249-260.
- 2) 春日晃章（2018）体力・運動能力の二極化傾向の出現とその後の影響子どもと発育発達，16(1)，11-16.
- 3) 平川和文，高野圭（2008）体力の二極化進展において両極にある児童生徒の特徴．発育発達研究37，57-67.
- 4) Matoba & Niu: The effects of castration and testosterone administration on the histochemical fiber type distribution in the skeletal muscles of the mouse. In: Morecki A, Fidelus K and Wit A (eds.), Biomechanics VII-B, University Park Press and PWN-Polish Scientific Publishers, Baltimore and Warsaw, P 606-611, 1981.
- 5) Lexell J, Sjöström M, Nordlund AS and Taylor CC (1992) Growth and development of human muscle: a quantitative morphological study of whole vastus lateralis from childhood to adult age. Muscle Nerve, 15, 404-409, 1992.
- 6) Oertel G (1988) Morphometric analysis of normal skeletal muscles in infancy, childhood and adolescence: An autopsy study. J Neurol Sci, 88, 303-313.

教員による推薦コメント：障がい者のスポーツ（曽根 裕二）

障がいのある方にとってのスポーツは、医療的な側面やリハビリテーション効果を期待する側面が強かったと思います。しかし、障がい者の医療機関への依存度の低減や通院回数の減少は、近年低くなっていることがわかっています。むしろ、スポーツに内在している「社会に参加し交流する」という側面によって「仲間作りや生活圏の拡大」という効果が期待できると思います。

私が最も印象に残っているのはパラリンピック銀メダリスト山本篤史さんの言葉です。「一番大切なのは、障がい者の生活レベルが上がって、人生を楽しむことができ、より豊かな生活を送ることができることだと思います。障がいを負ったぐらいで下を向いていたらもったいないぞ、という気持ちを伝えていければと思います。」（大阪体育大学 権19号）

スポーツを通じて努力する姿勢や他者を思いやる気持ちを習得し、「生きがいをもたらすスポーツ」「人生を明るくするスポーツ」の存在意義を共に確認したいものです。

近年、日常的な運動習慣のある子どもと運動習慣のない子どもの二極化が進んでいることが指摘されていますが、「もうひとつの二極化」も深刻な問題として広く認識されるようになってきました。「もうひとつの二極化」とは、定期的にスポーツ活動には参加しているものの、実施しているスポーツに含まれる動作の習得にとどまり、結果として運動量（歩数）は確保されていても基本的な動作の習得に問題がある状態のことを言います¹⁾。また、幼児期の運動発達で重要なことに経験する運動の多様性があり、同じ動きを繰り返して行うよりもいろいろ変化をつけた動きを経験する方が学習効果は高くなることが知られていますが、多様性練習効果と呼ばれています²⁾。国内の一流競技者のへの成育歴・競技歴に関する調査研究においても、競技者自身の過去（5、6歳頃から8歳頃）において、鬼ごっこや水泳、ボール遊びなど屋外で行う活動的な遊びを積極的に行っていたことが報告されています³⁾。さらに、エリートスポーツ選手において、多様なスポーツ活動への参加経験がある者が多いとの報告もあります。フィールドホッケー、野球およびネットボールのエリート選手は、エキスパートレベルに達する前に多くのスポーツ活動に参加していたことが認められています³⁾。また、アイスホッケー選手では、6歳から8歳までは平均で3種目、9歳から12歳までは平均で6種目までのスポーツに参加していたとの報告もあります⁴⁾。したがって、子どもの頃はひとつのスポーツに専念するのではなく、いろいろなスポーツを楽しむことが重要であることを示唆しています。

子どもが実施する運動やスポーツの単一化や固定化を回避する仕組みがある国もあります。ニュージーランドは南半球に位置することから日本とは季節が逆で10月から3月までが夏期、4月から9月が冬期ですが、夏期にはクリケット、ボート、タッチラグビーといった夏スポーツ、冬期にはラグビー、サッカー、バスケットボールといった冬スポーツが行われています。したがって、ニュージーランドの高校生は、夏期と冬期では異なるクラブ活動を行うことになります。ニュージーランドでは複数の種目に取り組むことは一般的なことであり、小さいときには5種類ぐらいのスポーツを行い、15歳頃で1～2つのスポーツに絞るようです。

したがって子どもにおいては、ひとつのスポーツのみを経験させるのではなく、いろいろなスポーツを経験させる方が将来、スポーツ選手として大きく伸びる可能性があることを示唆しています。一方、ひとつのスポーツ活動に参加していたとしても、例えば野球選手がサッカーを行うなどいろいろな種目にチャレンジする機会が設けられているなら、無理に他のスポーツに参加する必要はないのではないかと思います。子どものスポーツの指導者においても、複数のスポーツ活動を行うことは若干遠回りしているように感じるときもあるかと思いますが、未来ある子ども達のためにも、いろいろなスポーツを積極的に取り入れてみて下さい。

（参考文献）

- 1) 中村和彦（2010）子どもの動作の発達と指導～体力・運動能力にみる現代っ子の問題～．子どもと発育発達，8，42-45.
- 2) 酒井俊郎（2007）幼児期の体力づくり．体育の科学，57，417-422.
- 3) 関岡康夫，松井秀治，宮丸凱史，市村操一，菅沼史雄，勝亦紘一，小林寛道，天野義裕，有吉正博，岡野進，石塚浩，尾縣貢，加藤謙一，中村和彦，森田正利（1991）陸上競技の指導カリキュラムに関する調査研究-カリキュラムのあり方と基本構想-．平成2年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告，No. V競技力向上に関するスポーツカリキュラムの研究開発-第3報-，9-38.
- 4) Soberlak P and Cote J (2003) The developmental activities of elite ice hockey players. Journal of Applied Sport Psychology, 15, 41-49.

教員による推薦コメント：年長者のスポーツ（池島 明子）

年長者にスポーツをおススメするわけは・・・

- ・握力は全身の筋力の大まかな把握に有効⇒総合的な筋力の指標＝健康状態の指標
男性 26 kg未満・女性 18 kg未満■認知症のリスクが 2.1 倍に
握力の低い人■死亡率が 1.67 倍になる
- ・開眼片足立ち保持機能の低下＝下肢筋力の低下＝転倒要因（長く立ってられない＝転倒をおこす可能性がある）
開眼で 30 秒以下、閉眼で 30 秒以内に 3 回以上足がつく＝要注意
- ・歩行速度は日常生活、身体機能、健康度の自己評価と関連性が高い＝生活機能の予測が可能
通常歩行速度の遅い人■要支援・要介護状態になる危険度が高い、歩行速度が速い人■死亡率が 2.87 倍下がる
- ・中年期に週 2 回以上運動する■しない人と比べ、認知症発症率が 50 %、アルツハイマー病発症率も 60 %低い

※このような研究結果が報告されているからです。しかし、スポーツというよりも
「筋力トレーニング」「散歩」でよいのでは？ それでもよいですが・・・

◆認知症予防には、脳の機能低下や、それに伴う低活動状態による運動能力の低下を防ぎ、生活機能を維持することが重要
⇒社会参加（人との交流）、知的活動、音楽活動、脳トレ的レク活動の実践、運動の実践が効果的

◆健康長寿のためには、短い時間の積み重ねでよいので、毎日身体活動に取り組むことが望ましいとの報告もあります。

※「スポーツ」とは一定のルールに則って勝敗を競ったり、楽しみを求めたりする身体活動のことです。

⇒スポーツは、人と交流できる・楽しい・考える必要がある。

そして「スポーツを楽しむため」に日々トレーニングにも取り組める

です。年長者にはスポーツをおススメしたいのです。

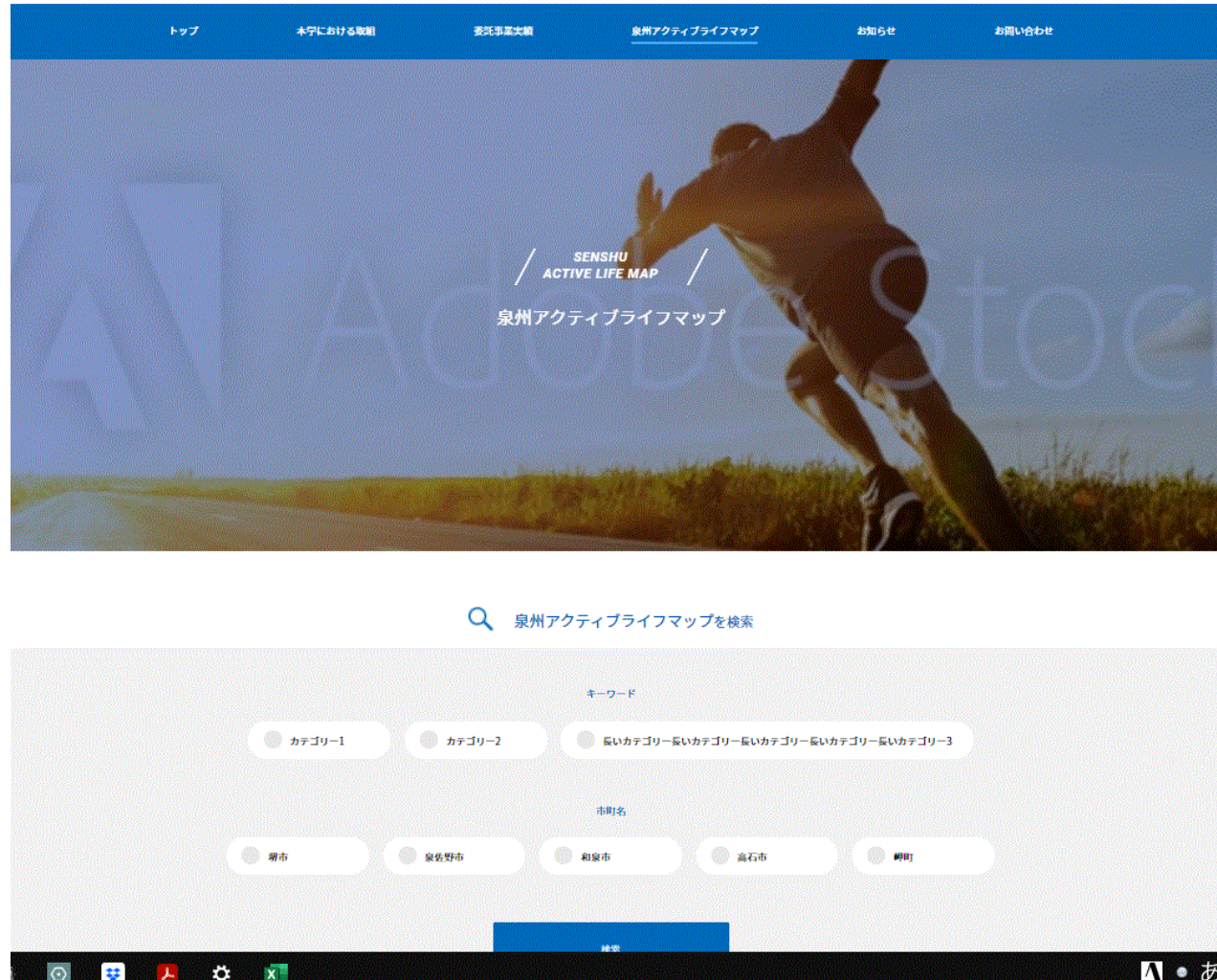
たとえば 散歩⇒「ノルディックウォーキング」・「スロージョギング」・「水中ウォーキング」

※会話がはじまる・仲間ができる・仲間がいるから続けたくなる・運動効果が高まる

さあ、年長者の皆さん、「若いころに行っていた」でも「新しく挑戦」でも、興味のある「スポーツ」をしましょう！！

大学スポーツの振興（仮）

PROMOTION OF UNIVERSITY SPORTS



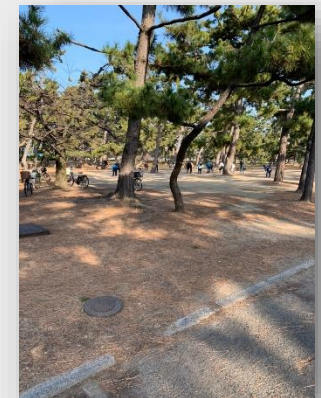


友金明香 先生
健康づくり 体力学 陸上部コーチ（長距離）

マラソン・ジョギングの魅力



泉州地域のジョギング・ウォーキングコース



浜寺公園

泉州地域のジョギング・ウォーキングコース（例）



SENNAN LONG PARKからマールビーチ方面



永楽ダム方面

障がい者のスポーツ



障がいのない人はスポーツをやった方が良く、障がいのある人はスポーツをやらなければならない。
(ハインツ・フライ：
車いすマラソン世界記録保持者)

パラリンピックのゴールは「スポーツを通しての共生社会の実現」です。障がいがある人もない人も障がい者のスポーツを楽しむことで、「工夫」や「公平」や「多様性」を身につけることができると実感しています。



専門家

大阪体育大学教育学部

教授 植木章三



既存のスポーツは、決まったルールに合わせてプレイする必要があり、障がいのある人が楽しむことが困難な場合が少なくありません。そこで我々はスポーツのルールを実施者の実態に適応させる「アダプテッド・スポーツ」の手法を用います。

障がいのある人たちのスポーツを考える時には、「できないこと」ではなく「できること」に注目します。こんな道具を使ったらできそう、ルールをアレンジしたら楽しめそう、一緒にやったら成功しそう。を大切に想像力豊かにスポーツを創造します。



専門家

大阪体育大学教育学部

准教授 曾根裕二

お名前	テーマ	施 設
伊原先生	アウトドアを楽しむ	大阪府立海洋センター、大阪府立少年自然の家、紀泉わいわい村、 稲倉野外活動センター、信太山野外活動センター
植木先生・曾根先生	障がい者のスポーツ	大阪府立身障者スポーツセンター（長居）、ファインプラザ大阪
徳田先生	レクリエーションを楽しもう	奥水間アスレティックスポーツ、わんぱく王国
三島先生	子どもの競技力を高める	スポーツ少年団
池島先生	ファミリースポーツ	泉州地域の公園（別添ファイル）
三島先生	いろいろなスポーツを楽しむ	総合型地域スポーツクラブ
池島先生	年長者のスポーツ	総合体育館、
友金先生	長距離の魅力	浜寺公園、永楽ダム、ロングビーチ、
菅生先生	スポーツで体も心も健康に	知識編
梅林先生	トレーニングの方法	知識編
徳山先生	人々のスポーツ行動	知識編
岡村先生	スポーツと栄養	知識編
金子先生	健康・レクリエーション	
曾根純也	地域スポーツ・サッカー	
前島先生	スポーツ医学	

⑤（仮称）泉州アクティブライフマップの制作

海外事例調査から得られた、行動や多様な趣向や個人のライフスタイルにあわせた内容や、活動が一覧でき、それらが様々な専門分野の知見を有する本学教員のリコメンデーション（推薦メッセージ）や助言と共に提供できるWEBコンテンツを制作した。

なお、各コンテンツの継続的な更新と、日々のアクティビティやイベントコンテンツの掲載などの頻度や自由度、拡張性を考慮し、外部サイト「地域活性化ソーシャル地図サービス Map Life (<https://www.mplf.net>)」を活用して、今後の展開を図っていく。

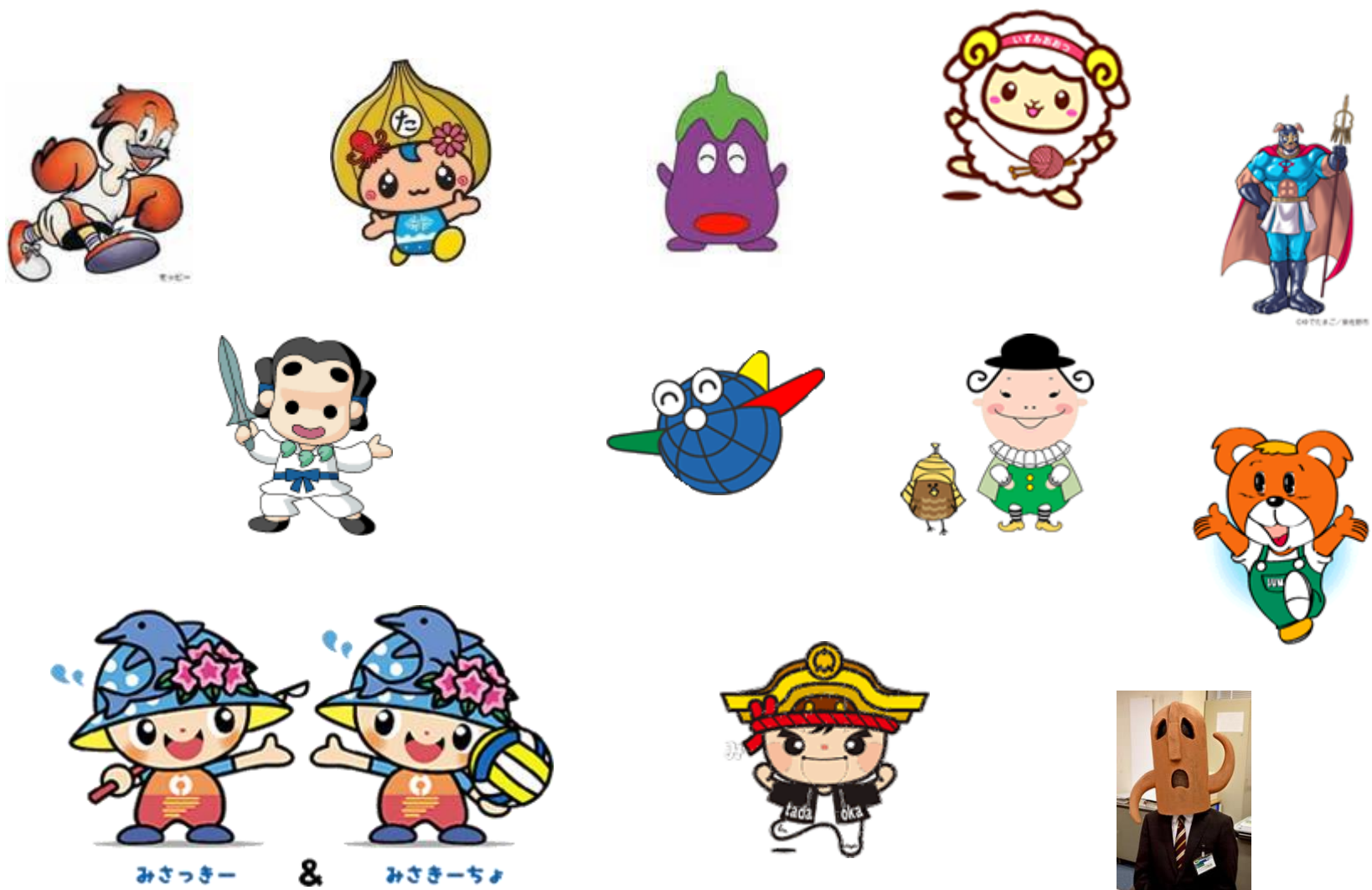


カテゴリー1 詳細



- ✓ なお、Map Lifeは、googleマップと連動するブログサービスであるので、今後、学生などが泉州地域の各スポットや施設で活動した内容や写真をポスティングしながら、アクティビティと魅力ある地域を発掘、広報、拡散しながら、展開するような施策も考えられる。
- ✓ また「アクティブ泉州」のプロモーションとあわせ、今後、制作・決定する同プロジェクトのロゴやキャッチフレーズと各地の「ゆるキャラ」を連動させた施策の展開なども企画・推進していきたい。

泉州のゆるキャラの活用（一部抜粋）



(2) 大学のスポーツ資源を活用したコンソーシアムの形成等

- ①本学の連携協定を通じた締結自治体や企業とのさらなる協働・連携の更なる促進
- ②ワールドマスタースゲームズ2021関西の開催への協力とそれを契機にした生涯スポーツ振興の推進・協力体制の構築
- ③既存の関係団体との連携協力の強化
- ④「泉州スポーツ・健康資源実態調査」とにもとづいた、本学の経営資源を活用した、泉州地域におけるスポーツ・健康まちづくりの推進策の立案と展開・拡充にむけた実証事業の実施
- ⑤①～④の取り組みならびに前掲「地域活性化に向けた具体的な取組の推進」を通じた「泉州スポーツコンソーシアム」構築

①本学の連携協定を通じた締結自治体や企業とのさらなる協働・連携の更なる促進

「泉州スポーツコンソーシアム」の形成を展望して

泉州地域9市4町には、それぞれ教育委員会が設置され、住民のスポーツ振興に寄与する事業展開をしている。しかしながら、それぞれの市町に在住の住民を対象とした事業展開を行っているために、同じ泉州地域に住んでいながら地域の運動スポーツ・レクリエーション資源を知ったり、利用したりする機会は限られている。住民のライフスタイルを考えると、隣町のショッピングモールに買い物に行ったり、休日は車で大きな公園に遊びに行ったりする事もあり、その行動範囲は広範囲に及ぶ。そのように考えると、泉州地域を一つのスポーツ生活圏とした情報の提供が求められる。

本事業においては、「泉州スポーツコンソーシアム」と称して、泉州地域の市町のスポーツ推進担当者や民間のスポーツ企業で構成する緩やかなコンソーシアムの形成を行った。これは、泉州地域自治体のスポーツ推進担当者と企業との間で緩やかなコンソーシアムを形成して一体的なスポーツ振興に取り組もうとするものである。

右の図の日程で本学の担当者が自治体担当者と面談し、コンソーシアム形成の趣旨について説明を行った。

自治体訪問予定表

日程	市町名	時間	富山	小田	酒井	備考
11/11(水)	泉南市		○	○		
11/24(火)	高石市	10:30	○	○		
11/25(水)						
11/26(木)	堺市	10:30		○	○	
11/27(金)	泉佐野市	14:30	○	○		
11/28(土)						
11/29(日)						
11/30(月)	阪南市	13:00	○	○		
	岸和田市	15:30	○	○		
12/1(火)	和泉市	10:00	○	○		
12/2(水)	貝塚市	13:30	○	○		
12/3(木)	忠岡町	10:00		○		
12/9(水)						
12/10(木)	熊取町	10:00	○	○		
12/15(火)						
12/16(水)	岬町	10:00	○	○		
12/24(木)						
12/25(金)	泉大津市		○	○		

②ワールドマスタースゲームズ2021関西の開催への協力とそれを契機にした生涯スポーツ振興の推進・協力体制の構築

2021年に開催予定の「ワールドマスタースゲームズ2021関西」は、新型コロナウイルスの影響で一年遅れの2022年に開催予定となった。泉州地域ではBMXが「サイクルピア岸和田BMXコース」で、水泳（オープンウォーター）が泉南市の「樽井サザンビーチ」での開催が予定されている。

ワールドマスタース大会のような一般の方々が多数参加できる生涯スポーツを対象とする国際スポーツ大会開催の機会は希であり、スポーツに関心を持つ重要なきっかけとして活用することが重要である。

先述したとおり、岸和田市のスポーツ推進委員や泉南市住民への調査結果からも、現時点での関心度の低さや、関与への消極性が顕著であった。同調査からも、地域住民や地域コミュニティへのプラスの影響を展望しているため、今回の「アクティブ泉州」で構築する泉州エリアのネットワークの充実を図り、開催自治体だけに留まらない、泉州地域の大会を契機した生涯スポーツのレガシープランの立案にむけての企画・検討を進めていくことが必要である。

③既存の関係団体との連携協力の強化

「一般社団法人 KIX泉州ツーリズムビューロー」は、2018年4月1日に泉州観光プロモーション推進協議会、KIX泉州国際マラソン実行委員会、華やいで大阪・南泉州観光キャンペーン推進協議会の3団体を統合のうえ設立されて地域経済活性化をめざす団体である。

本事業の趣旨や「アクティブ泉州」プロジェクトへの理解と今後の積極的な協力を得ることを確認できた。

今後の「アクティブ泉州」プロジェクトの展開や浸透は、同ビューローの施策としての協働を積極的に模索したい。

参考：一般社団法人 KIX泉州ツーリズムビューロー

設立：2018年4月1日

(泉州観光プロモーション推進協議会、KIX泉州国際マラソン実行委員会、華やいで大阪・南泉州観光キャンペーン推進協議会の3団体を統合のうえ設立)

設立趣旨・目的：

泉州地域における、風土及び文化が育んだ食材及び料理、豊かで美しい自然並びに多彩な伝統及び文化を活かした観光振興に関する事業を泉州地域の企業や住民その他関係者の協力を得て行うことにより、観光産業の成長を図り、もって泉州地域の文化の創造、人材の育成及び地域経済の発展に寄与することを目的とする。

事務所：

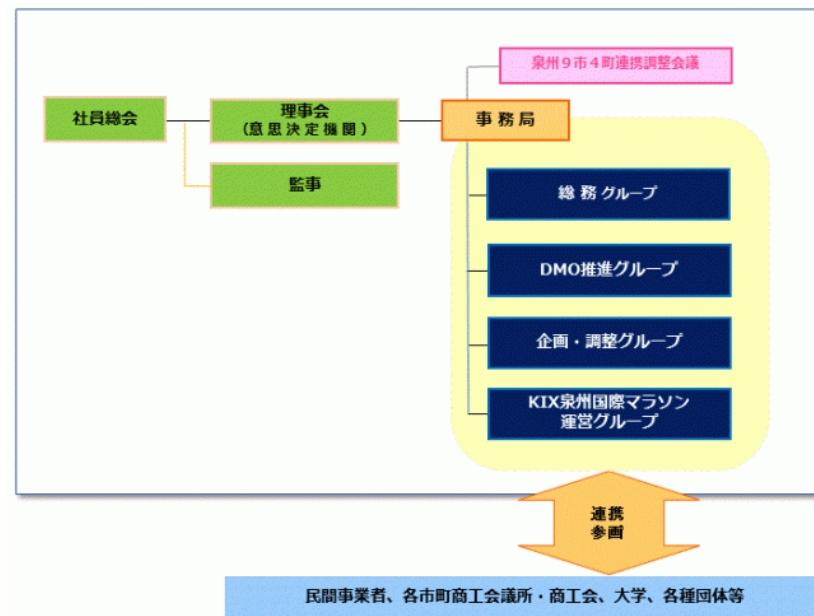
〒596-0054 岸和田市宮本町27-1

TEL:072-436-3440 FAX:072-423-4741

連携団体：

関西エアポート（株）、（株）池田泉州銀行、南海電気鉄道（株）、大阪観光局、泉州地域広域観光連携協議会など

理事長（１）	永藤 英機（堺市長）
副理事長（４）	永野 耕平（岸和田市長）
	阪口 伸六（高石市長）
	三浦 寛（関西西エアポート（株）常務執行役員）
	太田 享之（（株）池田泉州銀行代表取締役会長）
専務理事（１）	中村 浩次（（一社）KIX泉州ツーリズムビューロー事務局長）
理事（１４）	南出 賢一（泉大津市長）
	藤原 龍男（貝塚市長）
	千代松 大耕（泉佐野市長）
	辻 宏康（和泉市長）
	竹中 勇人（泉南市長）
	水野 謙二（阪南市長）
	和田 吉衛（忠岡町長）
	藤原 敏司（熊取町長）
	栗山 美政（田尻町長）
	田代 堯（岬町長）
	常野 久美子（（株）インターアクト・ジャパン代表取締役）
	佐藤 友美子（追手門学院大学教授）
	高木 俊之（南海電気鉄道（株）代表取締役専務執行役員）
	森川 国昭（西日本旅客鉄道（株）常務執行役員）
監事（２）	林 大司（林公認会計士事務所 公認会計士）
	西村 英一郎（さずな大阪法律事務所 弁護士）



(出所) 大阪泉州観光ガイド「KIX泉州ツーリズムビューロー」<http://welcome-to-senshu.jp/company/> (2020年9月24日20時閲覧)

④「泉州スポーツ・健康資源実態調査」（前掲）とにもとづいた、本学の経営資源を活用した、泉州地域におけるスポーツ・健康まちづくりの推進策の立案と展開・拡充にむけた実証事業の実施

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、本年度は新規の取り組みや実証事業の企画・展開が困難であった。

しかしながら、後掲するオンラインセミナーや各自治体担当部署などへの訪問や意見交換を通じて、「アクティブ泉州」の展開、それを推進する連携体制となる「泉州スポーツコンソーシアム」の趣旨や、その緩やかなネットワーク化のイメージは共有できた。

また各自治体や地域が有する経営資源や課題なども把握することができた。

今後は、これらの知見やネットワークを活用しながら、「アクティブ泉州」の浸透を図っていきたいと考える。

⑤①～④の取り組みならびに前掲「地域活性化に向けた具体的な取組の推進」を通じた「泉州スポーツコンソーシアム」構築

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、本年度は新規の取り組みや実証事業の企画・展開が困難であった。

しかしながら、後掲するオンラインセミナーや各自治体担当部署などへの訪問や意見交換を通じて、「アクティブ泉州」の展開、それを推進する連携体制となる「泉州スポーツコンソーシアム」の趣旨や、その緩やかなネットワーク化のイメージは共有できた。

また各自治体や地域が有する経営資源や課題なども把握することができた。加えて、後掲の意見交換会のような泉州地域の自治体関係者が一同に介する機会やそのための課題の共有を行ったことは、「アクティブ泉州」の展開や浸透を図る面でも貴重であり、今後も本学が専門的な知見や経営資源を活用しながら、各自治体や企業、地域の関係団体を先導していく役割として展望できた。

オンラインセミナー・コンソーシアムの形成

- ①オンラインセミナーの開催
- ②泉州スポーツコンソーシアムの意見交換会



OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES



NAMISHO GAKUEN
100th Anniversary

スポーツ庁委託事業

「大学のスポーツ資源を活用した地域活性化拠点形成事業」

オンラインセミナー






2021年2月24日(水)
(オンライン)
13:00~16:00

主催：大阪体育大学

大阪体育大学は、教育・研究の成果や知見、数多くのスポーツ施設や研究施設などの経営資源を活用し、スポーツに関わる人材育成に取り組んできました。そして今、大学には保有する様々な資源を活用し、地域における課題解決の拠点となることが求められています。大阪体育大学は、スポーツ庁「大学のスポーツ資源を活用した地域活性化拠点形成事業」を受託し、大阪南部の「泉州」エリアの地域活性化に向けた取り組みをスタートさせました。本セミナーでは、「大学スポーツ」を活用した地域活性化への期待と、大学による地域活性化への貢献について考えます。

内容：基調講演① 原口 大志 氏 文部科学省 スポーツ庁 地域振興担当参事官
大学のスポーツ資源を活用した『地域振興』

基調講演② 原田 宗彦 氏 早稲田大学 スポーツ科学学術院 教授
地域と大学による社会的・経済的価値の共創

事業報告 富山 浩三 大阪体育大学 教授
大阪体育大学が取り組む大学スポーツ資源を活用した地域活性化

意見交換 泉州地域(9市4町)自治体のスポーツ推進担当者によるディスカッション

お申し込み・お問い合わせ

大阪体育大学 スポーツ局
〒590-0496 大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1
TEL: **072-479-3900**
✉ info@ouhs-athletics.jp

本シンポジウムのご参加は
右記QRコードを読み取り、
申込フォームにアクセスの
上、お申し込みください。





大阪体育大学
2021年2月17日版

<日時> 2021年2月24日(水) 13時~16時(オンライン)

<主催> 大阪体育大学

<内容>

基調講演 1 原口大志 スポーツ庁地域振興担当参事官

大学のスポーツ資源を活用した『地域振興』

基調講演 2 原田宗彦 早稲田大学スポーツ科学学術院教授

地域と大学による社会的・経済的価値の共創

事業報告 富山浩三 大阪体育大学教授

大阪体育大学が取り組む大学スポーツ資源を活用した

地域活性化

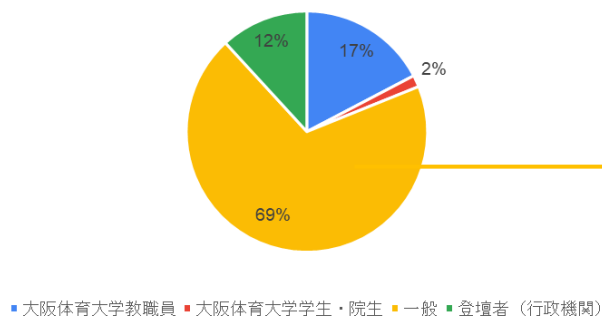
意見交換 泉州地域(9市4町)自治体のスポーツ推進担当者

によるディスカッション

(申込・視聴結果)

- ①大阪体育大学教職員：22名
- ②大阪体育大学学生・院生：2名
- ③一般：88名（属性は後掲）
- ④登壇者（行政機関）：15名（詳細は後掲）
- 合計：127名（①～③は申込者数）

申込み者の属性



(一般申込者88名の属性)

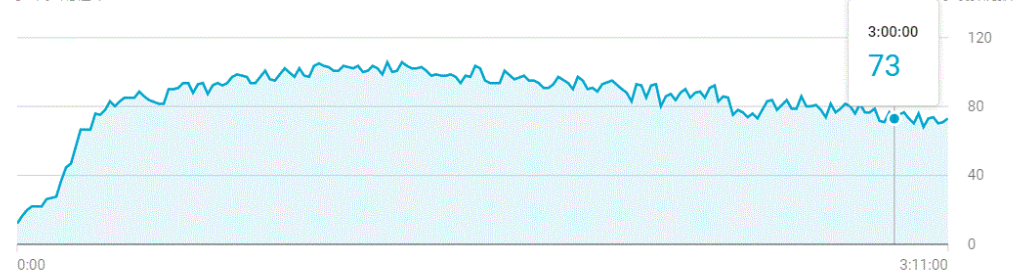
- 大学：52
- 学生：1
- 中学校・高等学校：1
- 行政機関：1
- メディア：4
- スポーツ団体・組織：7
- 民間企業・自営業：16
- その他：6

コンテンツに対する興味

ライブ配信の視聴者数の動向

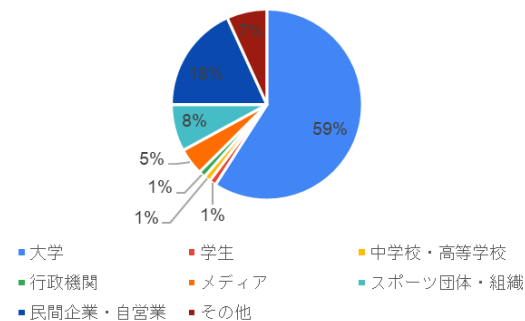
同時視聴者数

ライブ配信中



詳細

申込み者（一般）の属性



基調講演①サマリー：大学のスポーツ資源を活用した「地域振興」

講演者：原口 大志（スポーツ庁 地域振興担当参事官）

発表の要旨： ■ 「大学スポーツ振興」の意義や社会・経済的な価値

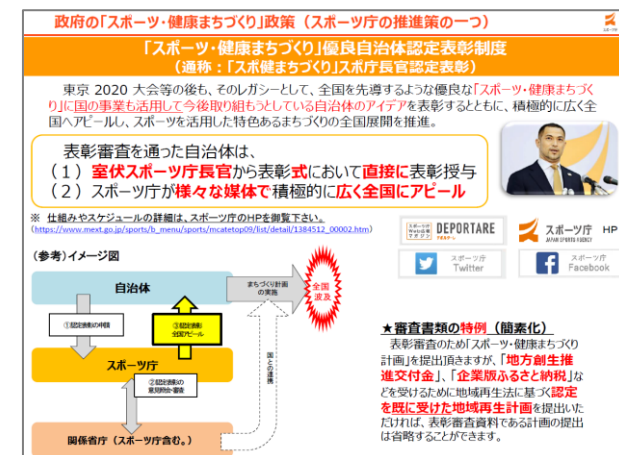
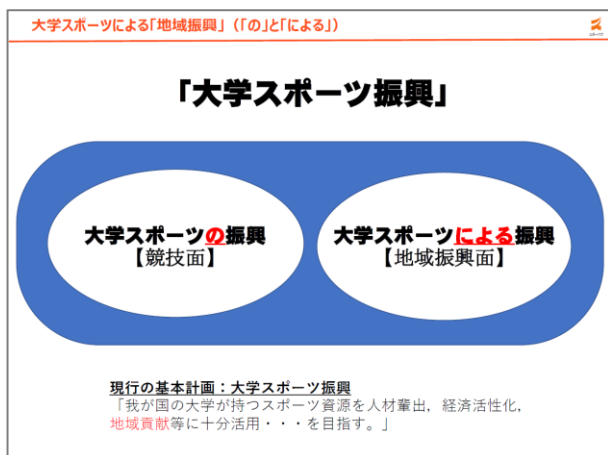
■ スポーツ庁の設立と大学スポーツによる「地域振興や経済活性化」

ならびに「大学スポーツの振興」の政策展開

■ 大学スポーツ「による」振興の先進事例の紹介

■ 地域スポーツコミッションと大学スポーツによる「地域振興」

■ 大学スポーツの振興の推進と地域活性化を通じた、まちづくりと、そのための推進政策や制度 など



基調講演②サマリー：地域と大学による社会的・経済的価値の共創

講演者：原田 宗彦（早稲田大学 スポーツ科学学術院教授）

発表の要旨： ■ 大学における地域貢献とその背景や政策や課題

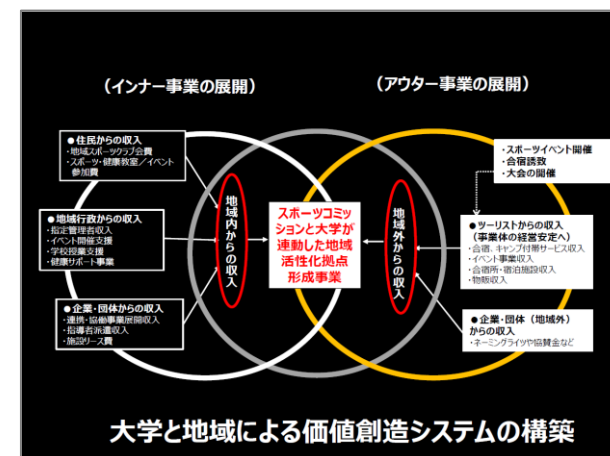
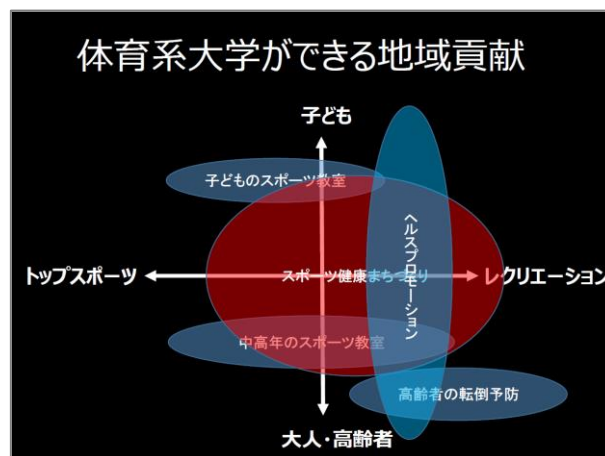
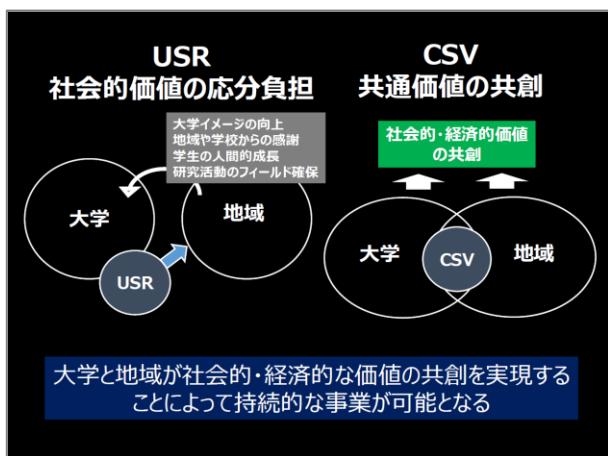
■ 従来のUSR（University Social Responsibility）型の社会貢献と

CSV（Creating Shared Value）的 社会貢献の展望

■ ニューノーマルの時代における大学と地域の関係づくり

■ 体育系大学ができる地域貢献やその可能性

■ スポーツ・健康まちづくり政策との運動 など



事業報告サマリー：大阪体育大学が取り組む大学スポーツ資源を活用した地域活性化

講演者：富山 浩三（大阪体育大学 体育学部教授）

発表の要旨： ■スポーツによる地域活性化やその意義

■ 2020年度スポーツ庁委託事業の概要

■ 「アクティブ泉州」プロジェクトについて

■ 調査結果（海外事例調査、運動・スポーツに係る実態調査など）について

■ 泉州スポーツコンソーシアムの形成と

スポーツ・健康まちづくりとの連動 など



事業概要

大学の有する資源；

人的（学生・教員）・知的（研究成果・専門領域）・施設（体育館・グラウンド）



泉州地域の資源

スポーツ施設（体育館・グラウンド・プール・ジム）、レジャー施設、ジョギングロード・文化的コモディティ（寺社仏閣・だんじり・繊維産業）

効果的な
プロモーション

人材育成
（戦略的価値共創）

スポーツ実施率の向上

65%の達成を目指して

アクティブ泉州カテゴリー（例）

子どもの競技力を高める

いろいろなスポーツを楽しむ

女子のスポーツ参加

年長者のスポーツ参加

障がい者のスポーツ参加

ファミリースポーツ

アウトドアスポーツを楽しむ

武道に取り組む

障がい者のスポーツ

障がいのない人はスポーツをやった方がよいが、障がいのある人はスポーツをやらなければならない。（ハインツ・フライ：車いすマラソン世界記録保持者）

パラリンピックのゴールは「スポーツを通しての共生社会の実現」です。障がいがある人もない人も障がい者のスポーツを楽しむことで、「工夫」や「公平」や「多様性」を身につけることができると実感しています。

専門家
大阪体育大学教育学部
教授 植木章三

既存のスポーツは、決まったルールに合わせてプレイする必要があり、障がいのある人が楽しむことが困難な場合が少なくありません。そこで我々はスポーツのルールを実施者の実態に適應させる「アダプテッド・スポーツ」の手法を用います。

障がいのある人たちのスポーツを考える時には、「できないこと」ではなく「できること」に注目します。こんな道具を使ったらできそう、ルールをアレンジしたら楽しめそう、一緒にやったら成功しそう。を大切に想像力豊かにスポーツを創造します。

専門家
大阪体育大学教育学部
准教授 曾根裕二

意見交換サマリー：泉州地域（9市4町）自治体のスポーツ推進担当者によるディスカッション

出席者：（後掲、来校参加8名、オンライン7名）

発表の要旨： ■既存の大阪体育大学との連携の取り組み

■連携の事例（体力促進プロジェクト、ロードレース大会、町立中学校運動部への学生指導者派遣、主催事業での施設の借用など）

■連携・協働の課題

■今後の協働施策や展開について など



2/24（水）自治体出席者一覧

2/24オンラインセミナー参加者（自治体）				
	市町	部署	お名前	ご役職
来校	岸和田市	教育委員会生涯学習部スポーツ振興課	南 貴人	-
	泉大津市	教育委員会事務局教育部スポーツ青少年課	奥野 修司	課長補佐
	貝塚市	教育委員会スポーツ振興課	藤原 由姫	-
	泉佐野市	教育委員会教育部スポーツ推進課	山路 功三	課長補佐
	泉南市	教育委員会教育部生涯学習課	石橋 広和	参事
	泉南市	教育委員会教育部生涯学習課	岩橋 正記	係長
	熊取町	教育委員会事務局 生涯学習推進課 生涯学習・文化・スポーツ振興グループ	清原 洋人	主査
	岬町	教育委員会事務局生涯学習課	八木 勇輝	-
	田尻町	教育委員会事務局社会教育課	北峯 示朗	主査
オンライン	堺市	文化観光局スポーツ部スポーツ振興課	服部 美紀	?
	泉大津市	教育委員会事務局教育部スポーツ青少年課	濱辺 晋一郎	課長
	泉大津市	教育委員会事務局教育部スポーツ青少年課	北浦 太一	係長
	和泉市	教育委員会事務局生涯学習部生涯学習推進室	澁田 誠	-
	高石市	教育委員会事務局社会教育課生涯学習スポーツ振興係	道井 里沙	係長
	忠岡町	教育委員会教育部生涯学習課	白石 雄大	?

「泉州スポーツコンソーシアム」の組成にあたっての意見交換会（非公開）

前掲した2/24のオンラインセミナー（公開）後に、本学と泉州地域の自治体担当者での非公開での意見公開会を引き続き、実施した。

その中で、「泉州スポーツコンソーシアム」やその推進イメージや体制の擦り合わせ、「アクティブ泉州」の展開や展望、各自治体の実施事業の共有や各地との協働について、意見ならびに情報交換を実施した。

要旨は、以下のとおり。

- 主な内容：
- 「泉州スポーツコンソーシアム」としての9市4町と大阪体育大学の連携方法や体制についての擦り合わせ
 - 組織体の構築や設立は予定しないが、緩やかな連携とのスポーツ・健康づくりの推進での協働を模索したい。
 - 泉州地域における実施施策の双方での共有や意見交換会の場はこれまで無かった貴重な機会でも今後の継続開催も希望したい。
 - 大学が有する知見やノウハウなどを、各自治体向けや、こういう機会でも積極的に披露し、地域のへの貢献をより展開したい。
 - 自治体側も、既存事業での大学連携もあるが、より一層、大学へ要望を提示し、その活用を進めていきたい。
 - 教育実習などの実績もあり、大学や学生の稼働や参画を促すには、授業化や単位化を行うことも1つの良策であろう。
 - 今回のスポーツ庁委託事業を契機に、泉州地域一体としてのスポーツ・健康づくりの推進策や体制についても検討したい。

(3) 外部資金の獲得のための企画・立案

- ①大学や学校法人の大学スポーツの振興を通じた地域活性化を推進するために必要な資金の調達・確保の方策の協議・検討
- ②大学スポーツの振興を図るにあたっての大学や学校法人における収益事業の推進の可能性や税制上の課題の検証
- ③その他、既存事業やこれから新たなに取り組むスポーツ・健康まちづくり事業の持続的な発展や自走化の検証

(3) 外部資金の獲得のための企画・立案

- ①大学や学校法人の大学スポーツの振興を通じた地域活性化を推進するために必要な資金の調達・確保の方策の協議・検討
- ②大学スポーツの振興を図るにあたっての大学や学校法人における収益事業の推進の可能性や税制上の課題の検証
- ③その他、既存事業やこれから新たに取り組むスポーツ・健康まちづくり事業の持続的な発展や自走化の検証

大学スポーツ振興に係るビジネスモデルの検討

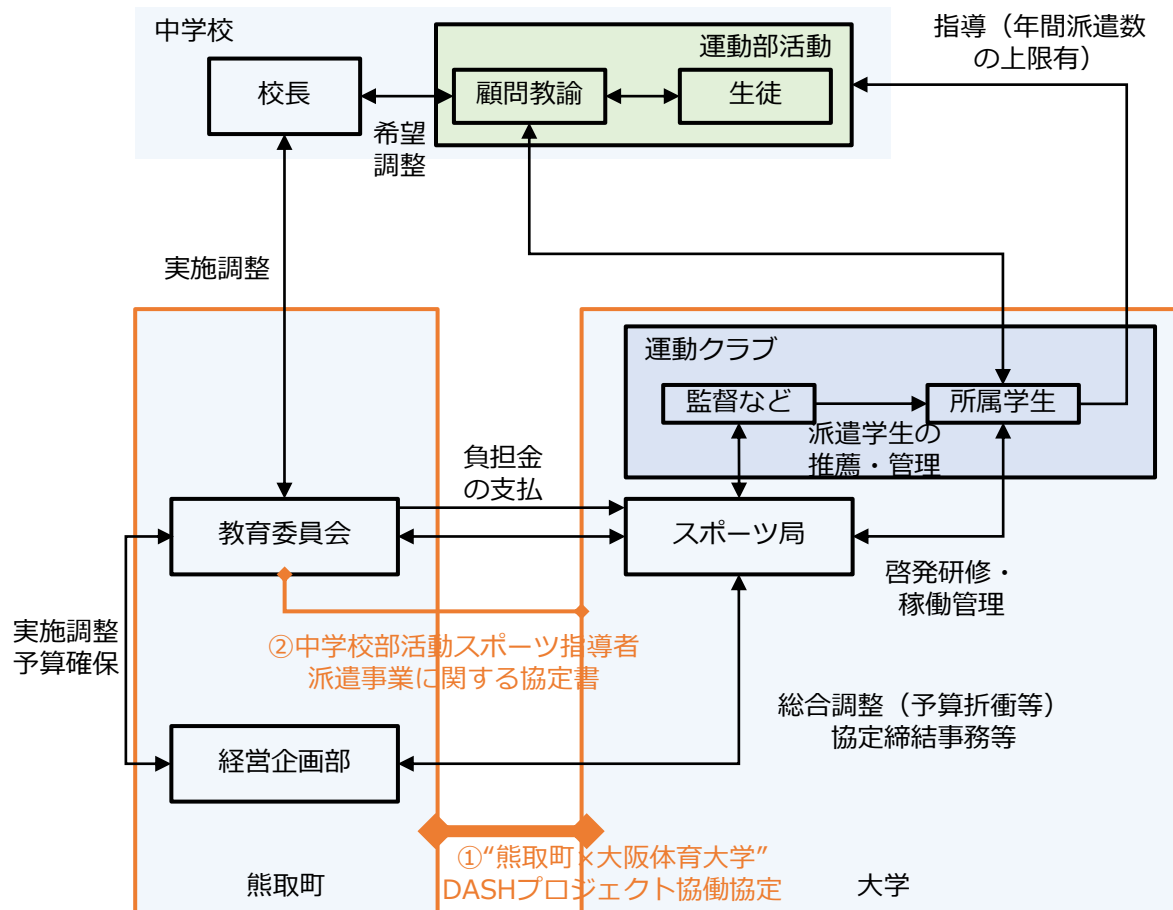
「大学スポーツの振興」において、本学や他学などにおける外部資金を獲得するためのビジネスモデルの実例などを列挙し、それらの「概要」「スキーム」「事業メリット」などについて検証し、以降にまとめた。

また他学の例は、本学同様、過去にスポーツ庁委託事業「大学スポーツ振興の推進事業」受託校から「収益力の向上に向けた取組」について事業に取り組んだ大学を採りあげた。

なお「大学スポーツの振興」における「外部資金の獲得」や「収益力の向上」については、まだまだ取り組み自体も少なく、発展途上であるため、本学も含めて、より取り組みの可視化と共有、トライアンドエラーを繰り返しながら、大学におけるスポーツを通じた社会貢献、地域振興における役割とその持続可能性を財源確保や収益面での検証が必要であるとする。

ビジネスモデルの例：熊取町立中学校への学生指導者の派遣（運動部活動改革の支援）

【事業スキーム】



熊取町（教育委員会、経営企画部）とスポーツ局で個別会議にて本件の連絡調整を実施。加えて、全体会議として月1回の定例会を4者（経営企画部、教育委員会、健康福祉部の各理事（部長級）並びに担当者とスポーツ局で打合せを実施）

【事業概要】

- 大学所在地の中学校運動部活動への支援策として、本学運動クラブ所属学生を指導者として有償派遣。中学校の運動部活動の指導体制への支援と、学生の指導経験の研鑽の両者の好機としたプログラム。
- “熊取町×大阪体育大学”DASHプロジェクト協働協定（2018年3月2日、①）の第一の協働「運動・スポーツの推進」に基づく事業。19年度末から実施中。
- 本件の個別実施・推進のために別途「中学校部活動スポーツ指導者派遣事業に関する協定書」を締結（②）。
- 20年度はコロナウイルス禍で11月からの開始で、2校3種目（剣道・バスケットボール・野球）4クラブに派遣中。
- 派遣に係る費用は、熊取町からの助成と大学財源を充当。
- 今後、第三者の参画・協力や財源確保による事業の充実と継続性の担保が求められる（熊取町としては、本事業への民間企業などからの参画、資金提供に支障はなく、大体大スポーツ局としてもその展開・推進を次年度以降、着手する予定である。

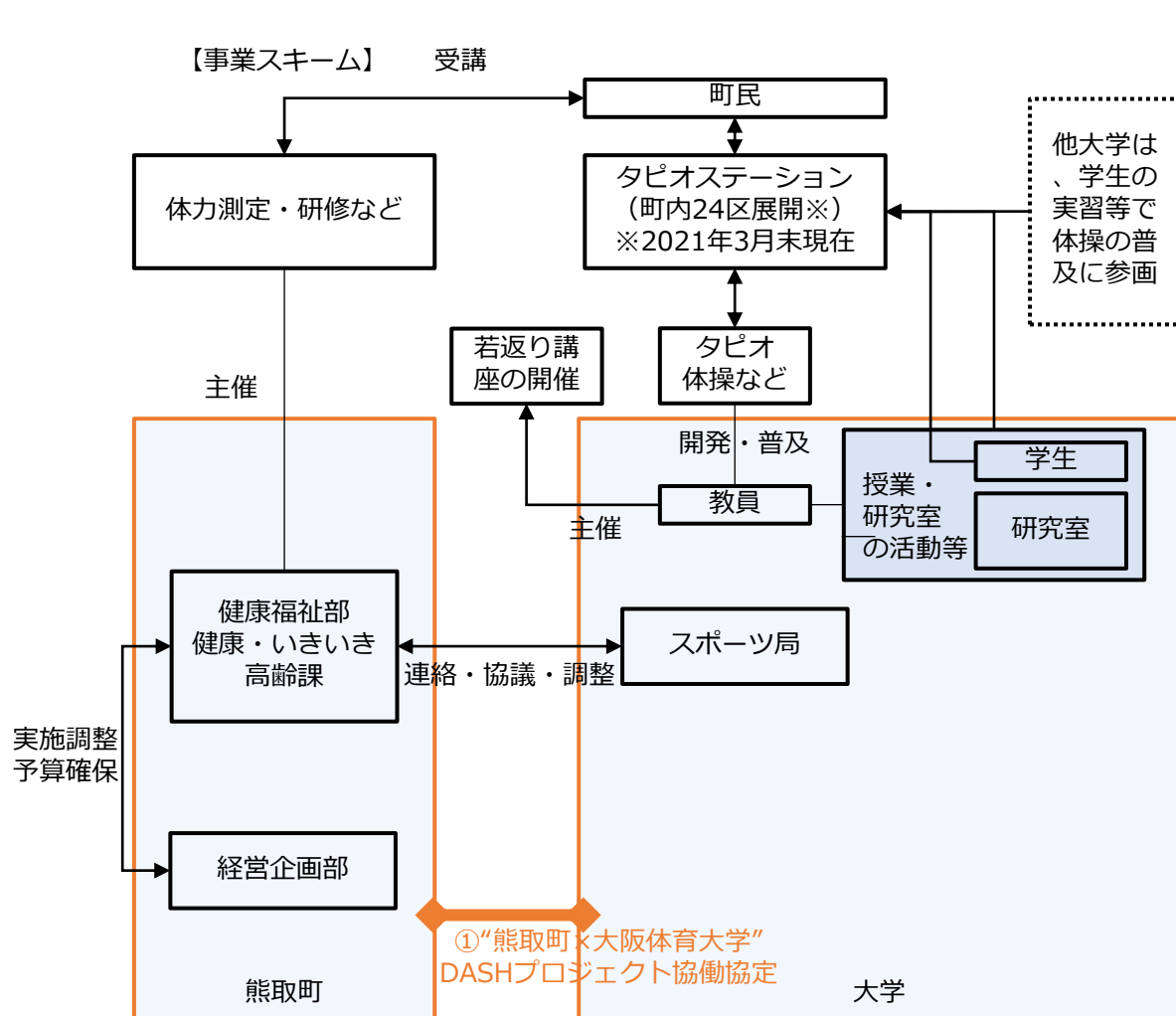
【事業メリット】

（生徒）年齢が近い本学生の高い競技力や経験を生かした指導の享受が可能
 （中学校）多忙な顧問の支援や専門指導の補填として活用。
 （熊取町）教員の働き方改革推進策の一助として期待
 （大学）運動クラブによる社会貢献の推進や憧憬の醸成
 （大学運動クラブ）学生の指導経験の研鑽機会の創出、経年・承継による各クラブへのファン意識醸成への一助となることを展望（所属学生のプライド啓発の促進など）

（備考）

これまでも顧問と学生との関係での外部指導者等の実績はあったが、学生の実習や就職活動、卒業などで個人的な関係性から継続性の担保がなかった。クラブを通じた派遣と、スポーツ局と教育委員会、学校の三者間の調整した上での実施により、クラブ内での指導者の承継や継続が可能になり、組織的な取り組み、展開が可能になった。

ビジネスモデルの例：町民への健康体操プログラムの企画・開発



熊取町（健康福祉部、経営企画部）とスポーツ局で個別会議にて本件の連絡調整を実施。加えて、全体会議として月1回の定例会を4者（経営企画部、教育委員会、健康福祉部の各理事（部長級）並びに担当者とスポーツ局で打合せを実施）

【事業概要】

- 本学教員が、熊取町と共に開発・監修した「くまとりタピオ元気体操（通称：タピオ体操）」や、ストレッチや筋力トレーニング、あたまの体操などをプラスした「タピオ体操+（プラス）」といった介護・フレイル予防をめざしたプログラムの展開と、その効果測定や評価なども加えて総合的なフレイル予防施策展開に係る助言とその推進をめざした取り組み。
- “熊取町×大阪体育大学”DASHプロジェクト協働協定（2018年3月2日、①）の第二の協働「健康寿命延伸や医療費等の削減に向けた取組」の具体策として展開中。
- 本学が経年で取り組んでいる「若返り講座」への町民参加料への助成による活動支援なども19年度から実施中。
- 今後、町民の日常における健康づくりの意識啓発、プログラムや環境づくりへの支援に加え、協働施策の名目どおり「健康寿命延伸や医療費等の削減」に向けたエビデンスの収集と分析フレームの検討、経年でのコンサルティングなど、町と大学での体制づくりが必要である。イベントの共催も検討中である。

【事業メリット】

（町民）日々の健康づくりを専門的にかつ経年のモニタリングも踏まえて取り組むことができる。

（熊取町）専門校である本学の知見や人材など活用し、EBPM（エビデンス・ベースト・ポリシー・メイキング。証拠に基づく政策立案）のシステム構築の一助として期待できる。

（学生）地域での健康づくりや町民活動に参画する好機であり、それらを学習、研究の対象にできる潜在的活動である。

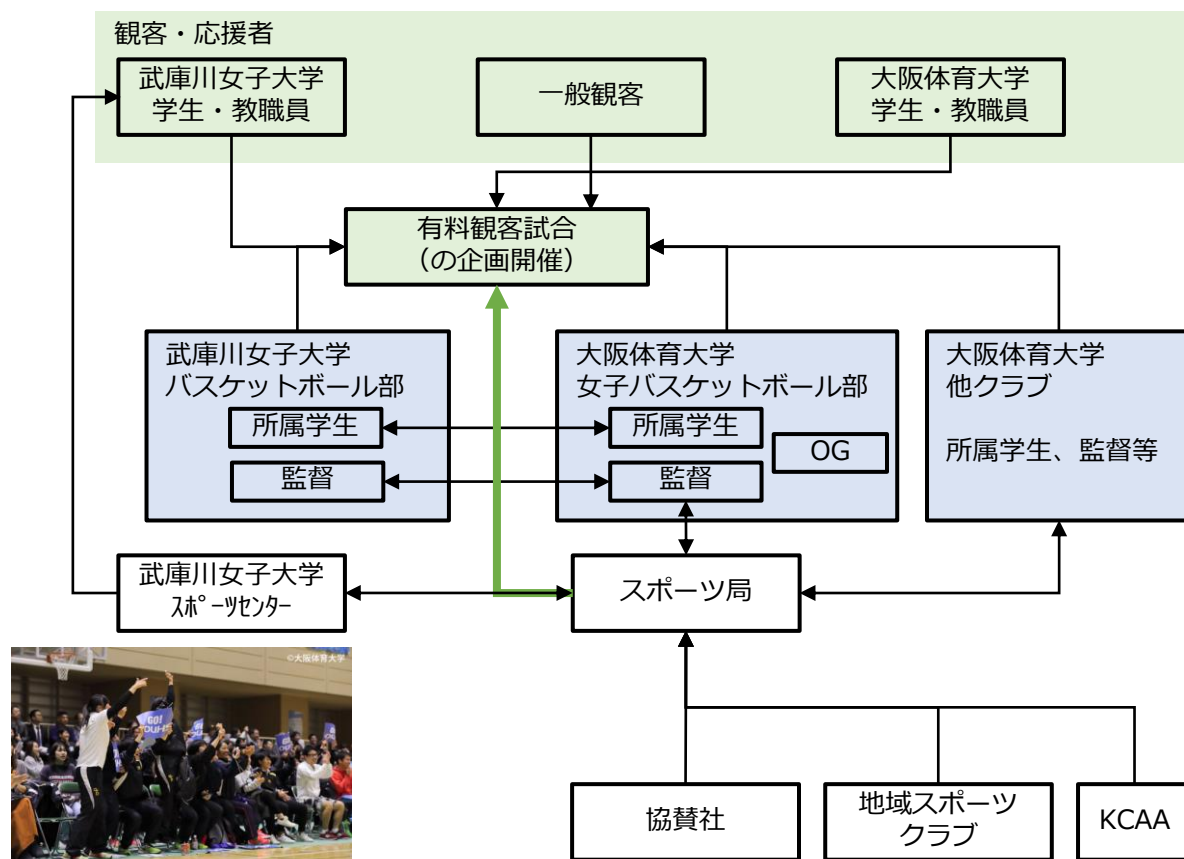
（教員・研究室）経年的な施策展開、データ収集・分析、町民への実践的なアプローチが可能になり、研究知見やノウハウを活かした社会貢献活動として位置付けることができる。

（備考）

熊取町所管課とスポーツ局間で、教員の依頼事項の整理や調整、事業実施にあたり、見積書の提示など、スポーツ局が橋渡しの役割を担うことで、本件の受託やスムーズな推進に寄与している。

ビジネスモデルの例：大学間の交流戦の企画・開催 (フレンドリーマッチ2018 大阪体育大学×武庫川女子大学)

【事業スキーム】



【事業概要】

- 出場機会の少ないBチームのゲーム機会の創出と、両校間のスポーツ交流プログラムの促進と、それらを通じた大学スポーツ振興を体現する企画事業として2017年度から武庫川女子大学主催で開始、18年度は本学を会場でスポーツ局が主管した。19年度は武庫川女子で開催した。
- 観客は、学生や保護者のほか地元の方々なども有償で観戦し、予想を遙かに超える500人に迫り、立ち見客がでるほどの大盛況で開催。
- 大会の企画・開催に、体育学部スポーツマネジメント専攻の学生（院生も含む）と、体育実技研究部の学生を中心に参画、準備から当日まで運営にあたった

【事業メリット】

（学生・教職員）両校バスケクラブの交流を通じ、大学スポーツ振興の良さを体感。学生自身も準備・企画・開催に関与し、プレーするだけない参画と経験の機会となった。

（両校のバスケ部）日頃の公式試合でのプレー経験がない選手の観戦試合を体験。演出なども含めて通常のリーグ戦やインカレより観客も多く、演出もあり、むしろ盛り上がる大会での貴重なプレー経験になった。

（大体大の他クラブ）ゲーム前や合間でクリニックや演出で参画、他種目の活動の場で、自身の活動を披露できる貴重な機会となった。

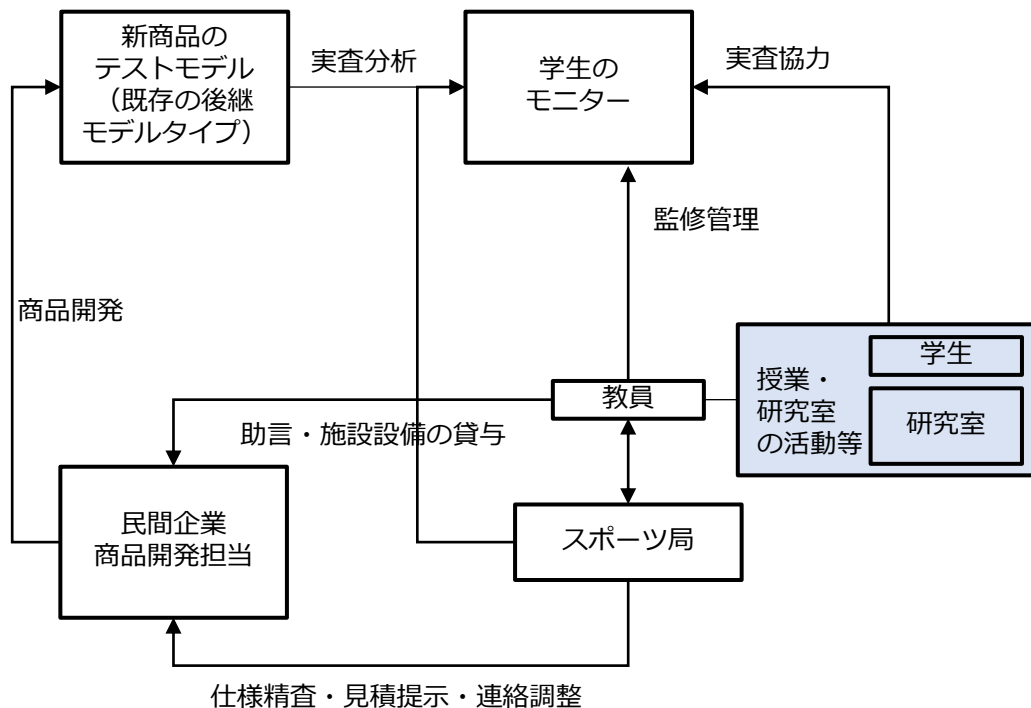
（両校のスポーツ担当部局）日頃からKCAAなどを通じ、相互交流、情報交換があり、協働・推進に支障は無かった。毎年の開催を重ね、より協働関係を構築し、関西からの大学スポーツ推進の興隆を先導したい。

（備考）

協賛メリットの企画・提案やパートナー企業などを確保し、持続的かつ発展的な開催となるよう事業スキームの精緻化、構築が必要。

ビジネスモデルの例：自治体や民間企業や関連組織との共同協働研究

【事業スキーム】



【事業概要】

企業が企画開発する新商品のテストモデルの実査、分析への協力ならびに結果に係る教員による助言業務を行った。

【事業メリット】

(学生) 企業の商品開発の過程の一部に有償で参画でき、企業人とのコミュニケーションもできる貴重な機会である。

(教員・研究室) 現有する知見やノウハウ、また実験室や機器・設備を有効活用し、企業の商品開発の一助とすることができる実践的な社会貢献活動である。また受託事業とすることで、その委託料等を研究費に充当することで、学生の稼働も伴うことで、教育・研究・社会貢献の好循環の構築にも寄与できる。

【備考】

- これまでは企業からの要請には、教員もボランティア的な関わりが慣例ではあった。それが故に企業側も大学が有する知見を活用し、自社製品の機能や質のエビデンスとして表明するための積極的な依頼や要望をすることが難しい部分もあった。
- スポーツ局が企業と教員や研究室間の仲介・橋渡しをすることで、ビジネスベースの推進ならびに体制を整えることは産学交流の促進にとって重要な事項である。
- 企業との折衝や企画・提案・調整は、スピード感と企業側のニーズや課題に寄り添った対応が求められる。スポーツ局は渉外的な観点から統括ディレクターが「リサーチ・アドミニストレーター (URA)」的な機能を果たし、この仲介・推進を担っている。これは教員自身の研究ノウハウや活動自身の予算化（仕様の調整や見積書の提示や金額折衝など）、つまり大学が有する付加価値の経済的（金銭的）な提示が難しいことを代替し、産学間の事業成立に寄与している。

本項では、「大学スポーツの振興」に資する資金調達や先例的な取り組みや施策について列挙し、**その可能性について検討した。**

- 資産運用（施設の利用）
- 特許など知的財産権の活用
- 産官学の連携
- 出資（出資会社の活用）
- 学校債・学園債
- 寄付金
- 協賛金
- クラウドファンディング
- 補助金や助成金、自治体との協働（まち・ひと・しごと創生法、地域再生制度、ふるさと納税など）

なお、2017年度からスポーツ庁が開始した委託事業「大学スポーツ振興の推進事業」でも6校が「収益力の向上に向けた取組」を検討している。それらの取り組みやその知見も本項で記載した。

資産運用（施設の利用）：鹿屋体育大学

大学や学校法人の自己財源の確保策として最も有効かつ既に実績ある手段として「大学施設の利用」があげられる。

鹿屋体育大学は、「研究・社会連携」施策として、先駆的に取り組んでいる。

（事業の概要）

体育施設・合宿研修所・非常勤講師宿泊施設及び講義室などは、学校教育上支障がないと認められる場合に限り、その施設を有償により各種スポーツ活動・講演会などに広く利用が可能で、施設見学も受け付けている。

※原則として団体による申し込みが対象

※施設等の都合により希望に添えない場合も有り（当日の天候により希望施設の見学できない場合も有り）

※受験生もしくは高校の先生については、別途、教務課入試係が対応。

（利用可能施設）

（施設の一時使用料、掲載施設は抜粋で他施設もあり／2020年12月1日から）

■総合体育館・主体育室（バスケットボール他）

・1面：施設333円、電気145円

・全面（全2面）：施設666円、電気290円

■屋内実験プール

・全面：施設9,240円、電気964円、重油2,498円、ボイラー運転監視料880円

・1コース：施設1,155円、電気120円、重油312円、ボイラー運転監視料110円

※プールはシャワー使用料1人/日あたり45円を加算。

※各体育施設の「水道使用料」は1人あたり1円/1時間。

（出



（<https://www.nifs-k.ac.jp/outline/facilities/guide.html>）など

資産運用（施設の利用）：鹿屋体育大学「施設利用状況・見学者」

体育施設等利用状況

	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度
利用団体(件数)	323	382	261	267	314	170
利用者数(人数)	35,359	48,773	42,478	48,997	53,072	58,888

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
利用団体(件数)	258	263	252	293	311	301
利用者数(人数)	60,945	71,200	46,058	46,608	42,336	44,543

	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成31年度・令和元年度
利用団体(件数)	386	470	558	586
利用者数(人数)	47,724	54,385	52,779	54,175

合宿研修所利用状況

	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度
利用団体(件数)	175	134	132	101	127	144
利用者数(人数)	4,582	5,116	4,792	4,132	4,268	4,919

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
利用団体(件数)	162	152	168	197	177	167
利用者数(人数)	4,181	3,880	5,722	5,889	5,702	5,484

	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成31年度・令和元年度
利用団体(件数)	251	242	205	194
利用者数(人数)	6,192	5,321	4,941	5,183

施設見学者

	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度
一般見学者	120	88	325	294	281	165	207	594	431	1023
受験希望者	124	306	261	270	317	466	190	337	130	828
合計	244	394	586	564	598	631	397	931	561	1851

	平成29年度	平成30年度	平成31年度・令和元年度
一般見学者	855	1132	1002
受験希望者	356	176	230
合計	1211	1308	1232

(出所) 国立大学法人 鹿屋体育大学ホームページ「施設利用状況」
(<https://www.nifs-k.ac.jp/outline/facilities/availability.html>)

※平成28年の施設見学者からSPLab見学者含む

資産運用（施設の利用）：西日本工業大学「キャンパスの積極的展開と準公共財として提言」

施設の利用や貸与だけにとどまらず、キャンパスの拡張や高機能化などを積極的に行い、加えて、私学施設の地域利用の積極的な促進とその公共財として保管機能として政策提言している「西日本工業大学」の取り組みを概観した。なお、本項作成にあたりインタビュー調査を2020年12月23日に実施した。

（概要）北九州市の南に隣接する苅田（かんだ）町（※）に工学部だけ所在した単科大学であった西日本工業大学は、2006年に北九州市の小倉城に隣接する大型複合施設（商業施設、放送局、新聞社、美術館、劇場等）の再開発事業に参画し、11F建て校舎を新設、2つ目のキャンパスを西小倉駅（小倉駅／新幹線のぞみ停車駅の隣駅）に新設し、デザイン学部（建築学科・情報デザイン学科）を開設した。

2008年には、小倉キャンパス近くの市有地に7階建ての大学院・地域連携センターを建設。市立中学校の建て替えて民間のノウハウと資金を活用するPFI方式が採用、民間企業4社と共同企業体（JV）を組んで提案コンペに応募、事業体として選定された。同市有地には、中学校校舎や体育館のほか、大学施設の隣に室内温水プールが整備された。

（大学施設の活用状況、2020年12月23日、西日本工業大学提供資料より）

	2017年度	2018年度
①おばせキャンパス（苅田町）	54団体／8、121名	142団体／13、517名 うち本学主催行事11回、2、073名
②小倉地区 （新校舎+大学院・地域連携センター）	46団体／4、350名	54団体／5、109名 うち本学主催行事4回、733名

2014年度からは文部科学省「地（知）の拠点COC（Center of Community）：工学とデザインの融合による人を育て地域を拓く拠点づくり事業」に選定、北九州市及び京築地域（苅田町、行橋市、みやこ町、築上町、豊前市、上毛町、吉富町）と連携し、同大キャンパスを拠点として大学の人材や情報の交流を進め、住民や行政だけでは解決困難な地域の課題について協働した。5年間（2014～18年度）での取り組み事業は3市5町内599か所。

（私学施設を準公共財としての役割（提言、教育学術新聞2019年3月6日から））

- ✓ 私立大学の地方自治体との連携は具体策に欠けるものが多く、財政難の中「公立化」だけが解決策ではいであろう。そこで大学施設を公共財として補完する「準公共財化」を行い、大学の地域貢献と自治体の公共施設マネジメントの柔軟化を図れないか？
- ✓ ついては、自治体の公共施設マネジメントに、民間施設である学校法人の所有資産の計画・更新も考慮してはどうだろうか？
- ✓ 大学施設が本来の講義や授業で使用されるのは前・後期の各15週で行事を入れても大学施設の稼働日数は200日程度で夜間の利用も民間ビルに比すと皆無に近く、減価償却に見合う資産活用かどうかは、財務上の検証が必要ではあるが、稼働率の向上とその地域利用の促進による準公共財として位置づけと活用は期待される施策ではあろう。

特許など知的財産権の活用：鹿屋体育大学「知的財産ポリシー」

大学における資産活用策のうち、研究シーズを活用した高度専門機関ならではの施策として、特許をはじめとして知的財産権の活用は有効であると考えられる。鹿屋体育大学では、「明るく豊かで活力に満ちた社会の形成に貢献するため、研究成果の公開を積極的に進めるとともに、研究成果に基づく知的財産の創造、保護及び活用を図る」ために、後掲の「知的財産ポリシー」を定め、その活用に取り組んでいる。

【知的財産ポリシー】

（知的財産の創造）

本学は、スポーツ・健康（体育・スポーツ、レクリエーション及び武道）に関する学術的分野において、先進的かつ独創的研究を推進し、社会に有益な知的財産を創造し、その権利化を積極的に図ります。

（知的財産の帰属）本学は、本学職員が職務上なした知的財産及び本学が法人として成した知的財産を、原則として本学帰属とし、組織的かつ一元的に管理します。

（知的財産の活用）

本学は、本学に帰属した知的財産について、本学職員の意向を尊重しつつ、技術移転機関等との連携を図りながら速やかに企業等に技術移転するよう努め、社会貢献のための積極的な活用を図ります。

（新たな知の創造）

本学は、知的財産活用対価について、その相当部分を本学職員に対し還元することにより研究活動に対するインセンティブを高めるとともに、本学にも適切に還元して新たな知の創造を目指します。

（啓発活動の推進）

本学は、本学職員が、本学帰属の知的財産を尊重するとともに、他者の知的財産を尊重する風土をつくるため、啓発活動を推進し、不正行為等を防止します。

（管理体制の整備）

本学は、知的財産の創造、保護及び活用並びに知的創造サイクルを円滑に推進するため、管理体制の整備を図ります。

（透明性のある運用）

本学は、知的財産を核とする産学官連携活動において、企業等と透明性が高く、かつ対等な関係を構築し、適切なルールの下でその活動を推進し、社会に対する十分な説明責任を果たします。

（出所）国立大学法人 鹿屋体育大学ホームページ「産学官連携・知的財産」（<https://www.nifs-k.ac.jp/property/academia.html>）